

325
393



始



千磐武雄譯

基督の事實

THE FACT OF CHRIST.

By P. Carnegie Simpson, M. A.

325-393



其
の
事
交

千
磐
武
雄
譯

ビ・カーネギー・シムプソン著

大正
5. 1. 27
内交

基督教興文協會の事業は、日本の基督信徒及び未だ基督教を信ぜざる人々の需要に適したる基督教文學の著作及弘布にあり。本協會は日本に在る基督教ミッションの同盟を代表せるが故に公同的精神を以て立てるものなり。されば本協會の會員及び維持者は必ずしも本協會に於て發行せる此書に現はれたるすべての意見に同意せるものと認むべからず。

引

此の書の原著者ビー・カーネギー・シムプソン氏は蘇格蘭グラスゴー府レンフイルド教會を牧し、同國少壯宗教家の一人である。紀元一千八百九十九年の冬、其の教會に於て、重に志道者の爲に講演したもので、最も簡潔に基督教の眞髓が基督の事實に在ることを論述したのが此の書である。氏は此の書の外に『人生の事實』及び『總長レニニー博士の傳』を著はして居る。

明治三十五年一たび譯出刊行したことがあつたけれども、譯文も不充分で、間もなく品切れとなつた。されど此の書の内容は、今日も猶ほ我國の志道者に頗る適切であつて、必ず誠實な志道者を満足さするものがあると思ふ。故に

再び口語體に改譯して基督教興文協會から刊行することにした。

原著は今や獨佛支那其の他の語にも翻譯せられて居るさうである。

大正四年十二月クリスマスの日

譯者識す

目次

第一章	基督教の基本	………	一
第二章	基督教の事實とは何であるか	………	二八
第三章	基督教の事實の最初の意義	………	五五
	(一) 基督教的品性	………	六〇
	(二) 道德の原動力	………	七三
第四章	基督教の事實の更に進歩したる意義	………	九六
	(一) 信仰の基礎	………	九九
	(二) 『言は即ち神なり』	………	一二二
第五章	基督教の事實の最後の意義	………	一三八
	(一) 罪惡の實在	………	一四三

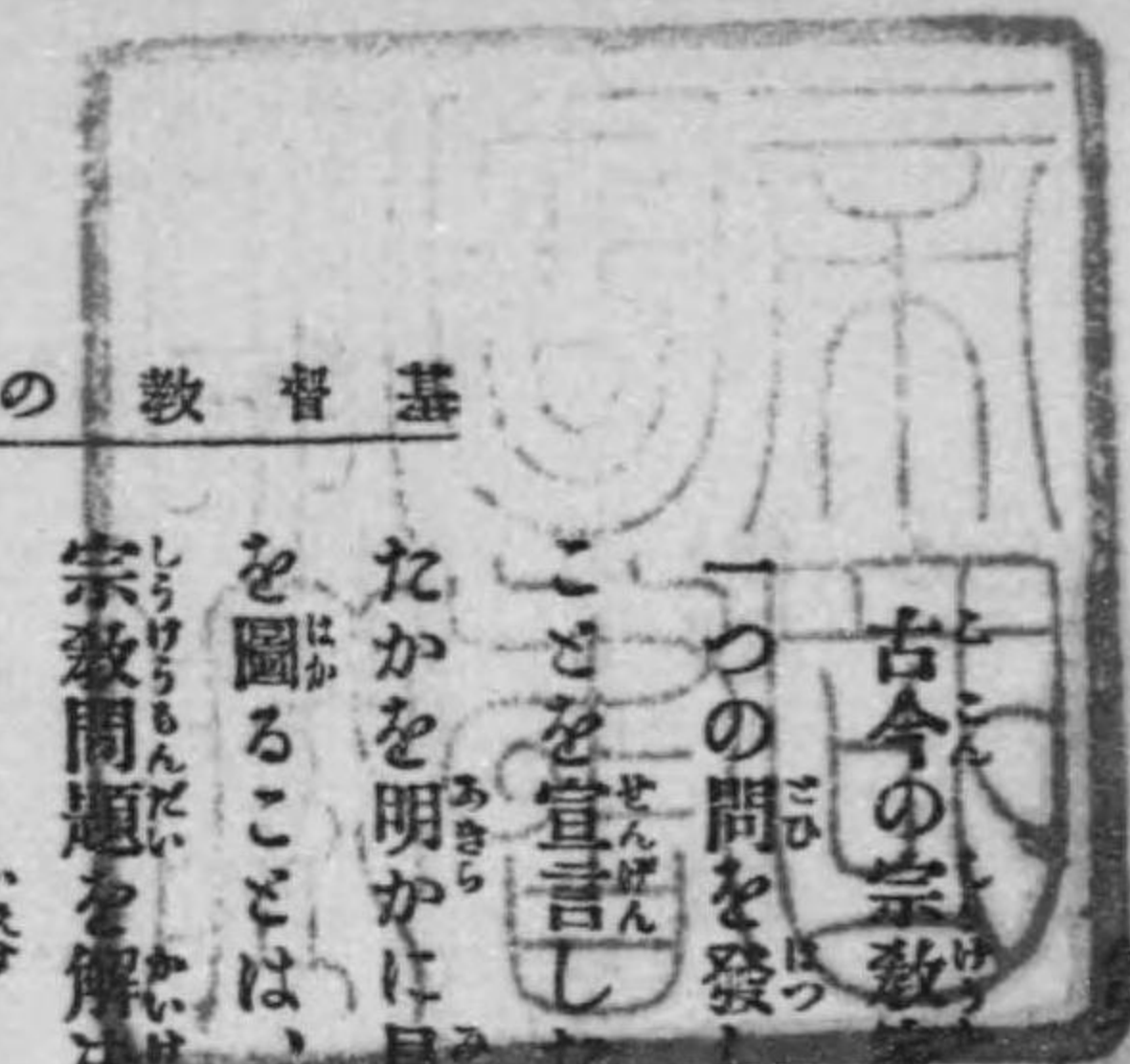
(二) 宥恕問題………一五七

第六章 基督者とは何であるか………一九三

目次終

基督の事實

第一章 基督教の基本



基督の教本

古今の宗教家のうちで最も偉大なる耶穌は、嘗て其の最初の弟子たちに對ひ一つの問を發して答を得、其の告白を基礎として其の上に己が教會を建設せんことを宣言した。こゝに彼が何を以て宗教の論點とし、又其の本來の起點とし、たかを明かに見ることが出来る。されば耶穌の爲られたやうに宗教問題の解決を圖ることは、常に彼が最上權威を有つて居る基督教ばかりでなく、又凡ての宗教問題を解決するに於て最も有効な方法であらう。

されど耶穌が提出した問の如何なるものであつたかを考察するときには、驚くに堪へたるものがある。此の話は勿論カイザリアピリビに近い所で耶穌が其の

弟子たちに對つて、「爾曹我を言ひて誰とするや」と問はれたとである。此の問は甚だ注意すべきものである。然し之を基督教の根本問題として考へなければならぬと云ふに至つては、頗る驚かざるを得ない。元來宗教家自身に關する事は興味が多いものではあるが、それよりも其の傳ふる獨特の眞理の方が常に一層大切なものであるやうに見える。それで耶穌が宗教上大切な問題と見做すのも必らずや神學上の重大な眞理、例へば天に在す父を信するやと云ふやうな問題か、若くは倫理學上の主要な原則、例へば山の上の説教の道德法を承認するやと云ふやうな問題に關するものであらうと吾人は預想した。然るに其實は之に反して神に關する問題でもなく、又道德に關する問題でもなく、單に耶穌自身に關する問題であつた。それは實に神學的問題でもなく、倫理學的問題でもなく、個人的問題である。然かも其の答は彼が力を極めて熱心に己が教會を其の上に建設せんことを宣言したものであつた。然し是れは甚だ顯著な事實であつ

て、吾人は容易く其の意義を理會することが出来る。即ち此の偉大なる耶穌は彼の人格に對する信念を基礎として己が宗教を創建せんと欲するのである。一體宣傳者の人格を以て宗教の根柢とするのは、宗教其ものに對して不謹慎の甚しいものである。然るに耶穌は敢て之をしたのである。是れは耶穌が基督教の基本をば、主として彼れ自身の特異な人格に見出すやうに人を指導したと云ふ所以である。

以上の議論にして、偶然な一事件のやうに思はるゝカイザリヤ・ピリピの告白よりも他の根據を要するものがあるならば、それは直に耶穌の教訓の法式に見出すことが出来る。其の教訓の法式は他の宗教家の爲す所と異つて居る。福音書の記す所に從へば、耶穌の教訓の特色は、彼が常に力強く自己を提供したことであつた。是れは最早信用すべき學者たちに由つて普く承認せられて居るのであつて、忽卒に福音書を読む者でも、亦容易く注目することが出来るのであ

る。モーゼ、イザヤ、バプテスマのヨハネなどの教訓に比し、又プラトリーの「會話篇」若くはモハメツドの「コオラン」に較ぶれば、愈よ其の然るを見出だすことが出来る。凡べて他の教師たちは唯真理の領域に人を指導しつゝあることを自覚するばかりで、偉大な人物ほど益す真理の前に自己を忘却せんとするのである。然るに耶穌は獨り最高真理を己が人格に攝取する者であるかのやうな態度を取つて居る。永遠の生命を求むる者には「我に従へ」と云ひ、父なる神を見んことを願ふ者には「未だ我を識らざるか」と問はれた。他の宗教家のうち一人として未だ斯かる言を敢て云つた者あるを聞かない。真理に就いて、誰か自ら真理を教ふるのではなく我は即ち真理であると明言したものがあるか。神を見るに當りて、誰が、自ら神を見るのではなく我を見るは即ち神を見るのであると公言したものがあるか。天下萬民の需むる休息を與へ、心靈の食物を與へ、元氣を與へ、宥怒を與ふるに際して、誰が、自ら指し示すのでなく我に由

つてそれを得よと宣言したものがあるか。モーゼも、預言者も、プラトリーも、佛陀も、モハメツドも、其んなことはなかつた。さう爲たものは獨り耶穌ばかりである。耶穌は公々然としていつも其のやうにしたのである。是れは最早や異論のない所で、他の教師たちから彼を區別することの出来る區分點である。他の教師たちは唯真理の音信を告ぐる者たることを自覚するばかりであるけれども耶穌は音信其のものである。彼等は單に光明を携ふるに過ぎないのであるけれども、耶穌は自ら「世の光」であると叫んだ。彼等は纔に真理を指し示すの外はないものであるけれども、耶穌は「我に來れ」と云つた。此等は皆耶穌の教訓の特殊な調子で、彼が其の弟子たちを訓練するとき歩一歩實行した所であつた。さればカイザリア・ピリビに於ける耶穌の問は決して偶然な一事件ではない。否な寧ろ深き注意を以て始めから計劃せられたもの、最頂點であつて、歡迎すべく大團圓を告げたものであると云ふことを理會することが出来る。

斯くて宗教を宣傳せんが爲に世に來つた耶穌は、人々をして彼自身に就て思考することを促した。炯眼なる獨逸の學者ヘルマンは「彼は己れの人格を指示することより他に更に神聖な事業があるのを知らなかつた」と云つた。かく耶穌が世に來つたのは神學若くは倫理學の系統を組織せんが爲めではなく、唯自己を天下の人心に紹介せんが爲めであつた。彼は、其の教へた教理に就いて如何に思考するかと云ふことよりも、基督に就て如何に思考するかと云ふ問を殘して、之を世人の思考するまゝに一任したのである。是れは既に云つた如く、耶穌が基督の基本をば彼の思想や教訓や模範よりも寧ろ主として基督の事實即ち彼自身の特異な人格に見出だすやうに、吾人を指導したとの意味に外ならないのではないか。今一人の卓出した獨逸の學者、即ち最も精密にして公平な批評家カイムは「基督の宗教は不思議にも彼の人格に歸着する」と云ひ、且つ「唯此の根本的實のみが其から出て來た宗教をば吾人に理解せしむる」と云つた。されば基督

教を眞實に理會しようと思ふ者は、少なくとも先づ基督に就いて忠實に思考しなければならぬ。即ち吾人の心意、情緒、及び良心は如何に彼を遇するかとの一點に歸着しなければならぬ。哲學者殊に啓蒙時代の哲學者は耶穌を離れて基督教をば單に永遠なる眞理の顯現として研究した。又近世の實際家は基督教を以て主に道德の原動力若くは理想として考察した。基督教は固より眞理の顯現であり、又道德の原動力若くは理想である。されど斯の如きは耶穌が基督教問題の主要問題に到達せんが爲めに人を指導した方法ではないのである。彼が宗教の研究者に對して指導した所は畢竟カイザリア・ピリピの問題の外に出でない。さうして此際に忘れてならないのは彼が嘗て世に出た宗教家のうち最も偉大な人格であること云ふことである。

宗教問題はこゝに一新生面を開いた。是れまで饑ゑ渴く如く神を求めた人々の心を攪亂した問題は、今や餘りに簡單に過ぐるやうに思はるゝために、果し

て満足すべきものであるかどうかと云ふことすら信じられない程の状態に再説せられたのである。然し斯の如き再説の基く權威に關しては、是れまで餘り重要視せられなかつたが今日程之を重要視することの切要なのはないのである。現今宗教問題に關して注目すべき二つの状態がある。一面に於ては、不信仰は今や漸く不可思議論に歸着し、他の一面に於ては、孰れが果して眞純な基督教であるかと云ふ問題に關し、頗る混雜と衝突とを來しつゝあるのである。少しく注意して此等の状態を観察するときは、兩者共に、少なくとも其の一部は創建者の指導に從つて基督教を研究しない所から起るものであることは疑はれないのである。

さて不信仰は今や殆ど不可思議論に歸着して居る。現代は最早ポルティルの時代でもなく、又自然神教者の時代でもない。誰もシャフツペレイ、トーランド、ボーリンブrouクなどの著書を読む者はあるまい。されど宗教は到底無くて

はならない。果して然らば、何處に人心を繋ぐべき宗教を索むべきであるか。思ふに今日の所基督教に匹敵する宗教は興り得ないであらう。新佛教の如きも眞實に人を改宗させる力があるかどうか。寧ろ世上の一語柄たるに止まるであらう。されど此等の事實は現代が基督教の信仰に賛同することを示すものではない。否な却つて強き嫌厭の情があることを示すものと云はねばならぬ。基督教をば正面より虚妄であると論ずるやうな反對論は、たとひ如何に勢力があつたにしろ、從來容易く之を論破することが出来た。されど凡ての宗教問題は理會力を超越するが故に基督教も亦さうでなければならぬ。多少の謙讓を粧うて婉曲に論ずる不信仰の如きは、一層狡猾な強敵と云はなければならぬ。現今多數の人心を観察するに、其の状態前者でなくして寧ろ後者である。彼等は悪意を以て宗教を拒む者ではない、寧ろ多くの場合却つて之を信じようと冀ふ者である。されど彼等は皆不可思議論者の態度を取り、宗教上の眞理は到底識

り得べきものでないと主張する。斯くて宗教的信仰は昔のソクラテース時代と同じく最早一種の『美しい希望』に止まつて、遠隔不確實なものとなつた。此等は必しも不可思議論の哲學的論述ばかりではない。思想ある多數者が宗教に對する不確定な一般的态度である。嘗に思想ある人々のうちに斯かる態度を認むるばかりでなく、最も憂ふべきは、世上をしながら斯かる態度を怪しむことなく、二二三の反例はあれども、宗教は遂に漠然たる概念に過ぎないものとなり、道德的熱情は消え失せて唯修養的訓言に變ずるの危険があるのにも拘はらず、敢て之を咎むる者がないやうになつた事である。

斯の如き不確定の原因は何であるか。斯の如き不可思議論の存する理由は何であるか。神及び靈魂に關する大問題に答ふることの困難若くは不可能を感ずることが是れまでよりも一層甚しきに至つたのは、正しく其の原因若くは理由であらう。げに宇宙の起原と意義とは共に茫漠として究め難く、人生の狀態は

益す紛糾して定かでない。吾人は宗教の方面から此等に關して多くを語らうと思つても語ることが出来ないものがある。吾人は自然を知ることが出来る。然したとひ自然に由つて無限の觀念に到達しても、其處に如何なる者が在つて自然と出で會ふかを確むることが出来ぬ。信仰と不信仰との戰には、監督バットラー若くはペーレーのやうな人々があるけれども、また其の終局を見ないのである。且つ神、啓示、自由、靈魂不滅などの問題に就いては、前日のやうに肯定的に信じ得る者が少ない。此等の問題は吾人の理會力を超越して識り得ることが頗る困難である。眞率な人々はハアバート・スペンサーを読んで己が不可思議論を哲學に構成し、稍淺薄な人々はオーマル・カヤムを読んで之を喜び、道に志せる數多の靈魂は遂に未だ満足する所がないのである。

然るに靈魂上の大教師とも云ふべき耶穌は斯の如き人々に對つて宗教問題の革命的改説を提供した。其の告ぐる所は畢竟次の如くである。云はく「汝は神

に關する大問題を解決することが出来ないと言ふ。それは汝の理會力の及ぶ所でないかも知れぬ。然し斯かる問題に接する他の方法がある。請ふ先づ汝に問ふ。我に對する汝の態度は如何。此の間はたとひ如何なる種類に屬することも、少なくとも答へ得らるゝものである。汝の不可思議論はこゝには適用されない。よしや神の存在が汝の理會力以上に在るとするも、基督の事實は決してさうではない。彼は歴史上の事實であつて、其の他の事實と同様に認識することが出来るのである。此の答へ得べき問に對する汝の心意的、道徳的結論は、一見測り知ることの出来ないやうに思はるゝ宗教問題を解決する端緒である。』

斯の如く耶穌は少なくとも答へ得らるゝ程度に宗教問題を再説した。彼は測り知ることの出来ない領域から實驗することの出来る領域に之を呼び出した。そうして是れは又基督教が不可思議論に對する實際的の答辯である。デイ・エツチ・リュウキスは、其の著「哲學史」に於て、宗教は「有効な基本を知識に提

供することが出来ないことを告白する」が故に、眞正な知識の領域外に放棄してしまはなければならぬと云つた。されど耶穌の研究法に従へば、基督教は全然場合を異にして居る。彼は其の弟子たちに對つて最も明白にして近づき易い基本、即ち彼等の面前に立て居る自己の人格を提供したのである。其の宗教の基本とする所は實驗することの出来る事實である。此の基本は信仰の領域に於ける確保し難い思想や觀念ではない。云はく「爾曹我をいひて誰とするや」「爾曹は基督に就いて如何に考ふるか」、「我は眞理なり」、「我に來れ」。基督教の基本は實にこゝに在るのである。此の基本は他の事實と同じく有効な歴史的人格に存するものである。かくて耶穌は宗教の基本が基督の事實に在ることを宣言すると共に廣濶な地に不可思議論を驅逐してしまつたのである。

勿論廣濶な地點に不可思議論を驅逐してしまつたとして、必ずしも之を敗北せしめたとは云はれない。よし基督の事實に對することが公平正直であつても、

それが必ずしも宗教的信仰に導くものではない。固より一層の研究を要するものである。されば先づ此に問ふべきことは、宗教に對して不可思議論の態度を取つて居る者の幾人が此の研究法に遵つたかと云ふとである。彼等は果して基督の事實に對し、自己の心意、情緒及び良心に照して、宗教上此事實が何等の意義をも有せないかどうかと云ふことを公明に考究したか、固より誰も不可思議論者たるの權利がないと云ふことは出来ないけれども、耶穌が宗教問題の論點と爲し、又起點と爲した所の間に對して、以上のやうに熟思した後でなければ何人も不可思議論者たるの權利がないと云つても不可ではない。されば耶穌の指導した方法から何等の助けをも得られないことを確認するでないならば、吾人は未だ宗教上の大問題を放擲する筈ではないのである。否な吾人にして熱心に誠實な心があるならば宜しくカイザリア・ピリビに於て耶穌と共に大切な數

日を送り、さうして後不可思議論者たることが出来るならば不可思議論者たるも未だ遅くはないのである。

耶穌が宗教問題を論述する方法が現代人心の特別な状態である不可思議論的傾向に對つて果して斯かる直接な意義を有つものであるならば、まして其の他の人々には一層直接な意義を有たなければならぬのである。基督教を信ずることは必ずしも現代の基督教研究者の唯一の困難ではない。更により大なる他の困難がある。それは他でない、何處に眞純の基督教を發見するかと云ふのである。何となれば基督教國には各種の基督教があつて孰れが果して眞純の基督教であるか、是れが實に現世紀の問題であるからである。斯かる徴候は基督教會の内と外とに於て見ることが出来る。

基督教會の外を見れば、有力な近世の基督教批評學、少なくとも破壊的でなく改造的であると自稱する批評學に於て、以上述ぶるやうな状態が存して居るの

を認めない譯にはゆかぬ。此等は基督教の頽廢を望まずして却つて之を救済しようと思ふものである。幾世紀の間傳説に掩はれ且つ腐蝕せられたものに換へて眞純な基督教を興へることを期して居る。基督教は今後に於て猶ほ誕生すべきもの、少なくとも再誕すべきものである。批評學は之れが葬式を營まん爲に來たのではなく、之れが再誕を助けんが爲に來たのである。何となれば基督教は其の最初の誕生の際に於て、既に搖籃中に絞殺されたからである。此の精神と目的とを以て「文學と教義」(ルノルド著)及び「ロバルト・エルスミトヤ」(ハムド夫人著)は著作せられた。是れは著者たちが自ら言明して居る所で、普く世上に知られた事實である。

余は、眞面目な歴史的研究の立場に立つ者に取つては、智識的新富豪とでも云ふやうな氣分が、此等の間に存することを禮讓を缺かないで云ひたいと思ふものである。或は既に幾世紀の間存在した基督教の構造を毀ちて、殆ど新に之を改

築しようと思ふが如き、或は基督教の主なる思想は其の根柢から誤解せられて居るゆゑに、別に之を改説しなければならぬと云ふが如き、或はヨハネ、パウロよりアタナシユス、アウガスチン、ルウテルたちまで遵奉し來つた系統は甚しい岐路に走つて居るが故に、新しい方向を取るやうにしなければならぬと云ふが如き、皆一種の投機者流の哲學らしく、頗る歴史的基礎を缺くの憾がある。果して云ふ所の如くであれば、過去の十九世紀は如何にも痛ましい過失に陥つて居るのである。使徒たちは空虚な香氣の裡に吾人を投げ入れたのである。吾人は實に軌道を逸して居つた。或は其の師耶穌よりも哲學的なヨハネが其の傳記を著はしたるが如き、或は曩には合理論者から基督教の「眞正なる創建者」と思はれたパウロが基督教史上甚だ重要な組織時代に出現したるが如き、實は却つて大に悲むべき事であつたのである。さうして、遂に「文學と教義」の著者のやうな材識を備へた誠實の士が出で、使徒等と吾人とを正路に引き返へし

又「ロバルト・エルスミーア」の著者のやうな天才ある熱心な女史が出で、基督教の古い構造をば面白く且つ便利に改築し、然かも其の古い構造は半時間ばかりの田舎紳士の物語に由つて脆くも破碎せられ、其の新しい構造は東倫敦の貧民窟にて大なる革命的の勢力となつたことを示して呉れたのは感謝すべきことである。此等の基督教改造説は必ずや多くの價値があることであらう。何となれば基督教會は常に過去の奴隷と爲り易く、師父の用語や信仰告白を以て終極の眞理と考ふるやうな危険があるからである。されど基督教の歴史をば徒勞に終らしめてはならないのである。

かく單純な解釋を試みんとする基督教改造説が世に歡迎せらるゝは甚だ著しい事實である。是れはやがて孰れが果して基督教であるか、其の傳説的記事はどの點まで眞純であるか、此等の問題に關してまだ確定しない所があることを示すものである。是れは現代人心の特別な状態で、基督教は既に十八世紀間

の試験を経て來たに拘はらず、基督教の宗教は猶ほ今後に於て試験せられねばならないと云ふ標語が各處に反響する所以である。さうして人望ある今日の所謂批評家の多くは、最も單純な基督教の宗教は何であるかと云ふ問題に對して、得意の解答を與へやうと企てつゝあるのである。

更に眼を教會の内に轉ずれば、此の間に答ふることの困難が減少したとは見えなないで、寧ろ却つて増加したやうである。志道者は今や種々不齊一な聲を聞いて適從する所に迷うて居る。一體基督教の眞否に關する問題に於て、議論が敵味方に別るゝのはさまで怪むに足らないけれども、自ら基督教の大家と稱する者が、何れが果して基督教であるかと云ふ單純な問題について、數箇の學派若くは教派に分裂するのは實に驚くべきである。或は教會の禮典に拘泥し、或は教義的信條を重んじ、或は行爲の道德的價値を尊び、或は信仰の内的經驗と新生とを主張する。一は諸君のバプテスマに就て質問し、他は諸君の悔改に關し

て質問する。甲は特に耶穌の死について語り、乙は諸君の生活に關して説くのである。かく幾多の教導者は往々自己の見解が眞理の相異なる一側面であること
を拒み、互に相排斥するやうになつて居る。彼の「信せざる者は罪に定めらる」と
云ふ通常は左程直截でない破門の語も又屢ば論敵の間に用ひらるゝのである。
さらば何を信せざれば罪に定めらるゝかと云へば勿論一定した標準があるので
はない。教會の權威か、禮典か、信條か、贖罪の教理か、聖靈に由る新生の必
要か、道徳的生活の價値か。最も單純な基督教の本質に關して、基督者の家庭に
於ていすら、屢ば眞理の混亂を來すばかりでなく、往々相互の愛情をも失はし
むるやうな争論を惹き起すことがあるのである。

した所であつた。然るに實際は全く之に反し、此は彼を罵りて糞糠の爲に麥を
も失はんとする者であるといひ、彼は此を目して、皮殻を棄てんとして凡ての
物を犠牲にするのも厭はないと云ふのである。教會の不過誤、聖書の無謬、信
條の教義、奇跡、恩寵の教理、此等の教説が若し破壊し去らるゝことがあるな
らば、基督教も又之と共に破壊し去らるゝであらうか。一は然りと答へ、他は
否など答ふる。戦亂の叫びの裡に在つて神の契約の櫃の畏敬しなければならな
いかどうかと云ふとさへ知らない昔のイスラエル人のやうな單純な人々に取つ
ては、是れは實に甚しい疑惑であつて、又熱心な基督教反對者に取つても、自
己の全力を擧げて攻撃した點が眞の戦線内になんことを屢ば告知せらるゝやう
な頗る不満足の種類なることがあるのである。此等の結果は恰も
撃ちつ撃たれつ亂れ戦ふ、
あやめも分かぬ闇の夜に。

と云へるマシユウ・アルノルドの詩句の如くである。虚實相雜はり、勝敗は定かでない。思ふに、基督教論争の「レコード」の中未だ曾てこのやうな實例はないのである。斯かる混亂は時として智識上若くは其の他の點に於て壯大な光景を呈することはあらうけれども、實は甚だ無益の事である。是れは眞の戦争ではない、眞理と誤謬、光明と暗黒、信仰と不信仰との戦争ではないのである。かゝる混亂の裡に於て、耶穌の聲はカイザリア・ピリピの昔の如く、特に著しい意義を帯びて吾人の耳を打つものがある。彼は諸君の種々なる改説と議論の中に立つて次の如く云ふのである。「問題はこゝに在る。汝は我を誰とするか。我に對する汝の態度如何。批評家も此の問題を放棄することは困難である。教會も又是れが結論を埋没することは出来ないであらう。汝若し基督教を發見しやうと思ふならば、宜しく我に來り、我の我たる所以、我が汝の心意、情緒、良心に對して有する意義に於て之を求めよ」。かゝる指導には服従しなければならぬ。

らない數多の理由がある。是れは最上權威を有する者の指導であつて、耶穌の他誰も其の基督教を改造しやうと發言し得る者があらうとは想像し得られないのである。耶穌の指導は甚だ直接に吾人に訴へ、且つ知識上、道徳上の興味に満ちて居る。かく耶穌の爲したる宗教問題の改説は不可思議論者にも答へ易く又志道者にも明瞭であつて、誤謬と混亂とに陥らないやうにすることが出来る。志道者は少なくとも自己の基本を知り、之に由りて其の研究を開始することが出来る。縦令未だ基督教の何たるかを知らないでも、其の所在を知り、少なくとも何處に其の源泉があるかを悟ることが出来る。其の身邊に幾種かの基督教があるのに満足することが出来ず、之に當惑し、恐くは又之に反動して居る際に、靜に基督教の據つて立て居る「山に向ひて目を擧ぐ」ることが出来るのである。基督教は神學若くは倫理學の一派ではない。又社會的若くは政治的の目的を有する制度でもない。全然此等と別個の一大現象、即ち耶穌基督の人格の事實を

基礎として存立するものである。基督教本來の基本は、疑ふべくもなく、此に存在して居る。基督教の構造はよしや如何なるものであつても、其の據つて立つべき地盤は此に在るのである。

凡べて何れの研究を問はず、最初に決定すべきものは其の基本である。さうして基督教の基本は、耶穌に従へば、彼自身の事實に索むべきことが既に明白である。耶穌の研究法に従はうと思ふならば必ずや此の事實から出發しなければならぬ。神學の思想若くは倫理學の教説よりするでなく、先づ基督教の事實より研究を始め、其の事實とは何であるか、如何なる意義を有つて居るか、此等の問題を驗證しなければならぬ。是れは實に正確に、明瞭に、單純に基督教を學ぶの道であつて、又齊しくあらゆる宗教上の問題を攻究する良法である。

斯く云へば議論に於ては既に何の不満足もないやうであるが、猶ほ多少吾人の心に反省が起つて來て、基督教の宗教的價値を減ずるの恐れがないではない。

元來基督教の基本は基督教の事實に在ると云ふけれども、其の事實たるや大凡二千年前の事實ではないか。さうして直接に耶穌に交はつた人々に取つては、既に説いたやうに、己を彼等に提供することに由つて彼は宗教的意義を有つ者と爲つたであらう。されど今日の我等に對しては如何にして同一の意義を有つ者となるであらうか。たとひ如何に驚嘆すべきものがあつても過去の人物に果して如何なる宗教的價値があり得るのであるか。宗教の要求する所は現生活に於ける心靈上の眞理である。かゝる眞理は勿論耶穌の教訓中に存するであらう。故に耶穌の教訓は宗教の基本たることが出来るであらう。されど耶穌の事實に此の眞理があると主張するは果して宗教的であり得るか。歴史、神學、若くは倫理學の思想と相異つて居る宗教が、どうして耶穌の事實に其の基本を發見することが出来るか。耶穌の最初の弟子たちはさうすることが出来たであらうけれども、今日の我等がさうすることの出来ないのは到底避け難い不幸ではある

まいか。基督の事實を研究すれば、歴史的の結論若くは之に類する何等かの結論に達することは出来るけれども、如何にして宗教其のものに達することが出来るか。宗教の基本は元來人の靈魂中に存在して居る靈的生命の永遠なる真理でなければならぬ。

されど此の疑問（基督教の内容が歴史に由らず哲學に由つて開發しなければならぬと云ふ意見は、ヘゲデルの思想に其の最も權威ある主張を見出すのであるが）に關して今此に詳論することが出来ない、又詳論するの必要を餘り認めない。吾人が現に研究しやうとするのは唯次の一點に止まるのである。即ち過去の歴史である基督の事實は之を研究する者の心意、情緒、良心に對して果して眞正なる宗教の基本となることを妨ぐるものであるかどうかと云ふことである。吾人は先づ之を驗證しなければならぬ。さうして吾人は豫め之れが判定を下だしてはならない。吾人は既に基督教の立つて居る本來の地盤を知つて居

る。其れが今日も猶ほ果して有効であるかどうか先づ之を驗證するがよいのである。基督教本來の地盤は基督の事實である。さらば基督の事實とは何であるか。

或る人は、此の問題も亦哲學的の臆斷と黨派的の偏見とに陥つて居るものであるから、研究の價値がないと云ふかも知れぬ。今や論争の濃霧は深くガリラヤの山々を鎖して居る。されど此等の困難に由つて容易く沮喪してはならない。眞率な知識と誠實な意志とを以て此の大きな事實に就き猶ほ發見し得らるゝものがあるのを信じて失望してはならない。吾人は少なくとも此の事實を驗證しなければならぬ。知識界の泰斗ベエコンは「或る問題について何事か知り得らるゝかどうかと云ふことは之を辯論するよりも驗證するに由つて決せらるゝ」と云つた。

第二章 基督の事實とは何であるか

耶穌基督は云ふ迄もなく嘗て生活した最も偉大なる人物である。凡て人物の偉大は二つの標準に由つて定まる。第一は人類に及した感化の宏大なこと、第二は其の品性の純潔にして威嚴あることである。何となれば善良でない者は決して偉大であることが出来ないからである。此の標準に照すときは、耶穌は實に鶏群の孤鶴であつて、最大の感化を有つて居られると共に又最善の人格である。今吾人が耶穌の事實に關して論じようと思ふのは、以上二つの標準のうち前者よりは寧ろ後者であつて、彼の事業よりは彼の品性に關するものである。耶穌が人類の生活と歴史とに及ぼした比類のない印象については、余は單にレツキーの『歐洲道德史』中最も有力な一節を引用するだけにて満足しよう。即ち「活動に富める耶穌の三個年の短生涯は人類を更生せしめたと柔げたことに

於て、哲學者の議論や道德家の訓言よりも遙かに大なるものがあつた」と云ふ一節である。若し此の言が偽りでないならば、耶穌が實際生活に影響を及ぼした歴史的偉大に於ても、羅馬の歴史家タシタスと希臘の諷刺家ルシヤンとが、唯僅かに一句を以て叙し去り冷笑し去つたにも拘はらず、彼は確かに他の人物よりも嶄然一頭地を抽んづるものがあつたのである。之れと同じく耶穌は道德的品性に於ても卓出せる人格であつた。此の點に於て、彼が歴史上他の聖人傑士に比べて道德的に超越した所があることを挙げ示すことは甚だ容易い事である。然し是れは唯耶穌の品性に關する真理の一部分を言明したに過ぎないのである。吾人をして全體を云はしむれば、耶穌は單に他の人傑よりも罪が少なく徳が高いと云ふばかりでない、其の卓越は比較以上に在る絶對的卓越である。彼は實に汚點のない完全な人格、一個無罪の神人である。

一體消極的の判定を爲すことは困難な事であつて、絶對的に之を爲すことは殆ど不可能である。或る人の生活と品性とに全く汚點がないかどうかを驗することは到底出来ない業である。されど耶穌の場合は全く之に反して、其の證明は、判定せらるゝ事柄の性質と共に頗る強固なものである。耶穌の仇敵は實に其の證人であつた。憎悪と害心とを以てする彼等の邪曲も、遂に彼に對つて道徳上の非難を加ふることが出来なかつた。「此の人は罪ある人に接はりて共に食せり」と云ふやうな彼等の間諜心も用をなさなかつた。耶穌の友も又其の證人であつた。彼等は耶穌を以て「罪を離れ」た者と思つた。彼等は正統な猶太人でも「義しき者なし、一人もあることなし」との教に浸潤して居るものである。然かも自家撞着に陥るのを顧みず、其の有つて居る聖書に反して、「然り、此處に少しも罪を犯さない一人がある」と云はなければならなかつた。且つ吾人も又耶穌の品性の全く汚點のないことを證明する證人である。何となれば耶穌の友

は漠然たる讚辭より以上のものを以て彼に就いて吾人に語るからである。彼等は耶穌の生涯につき、短いけれども又精細な記事を吾人に殘して居る。彼等は漠然として耶穌の品性の汚點のないことを斷言せず、事實を擧げて之を示して居るのである。彼等が斯の如きことを爲し得る譯は、實際の生活を其の根據とするの外、決して他の途がないからである。吾人は其の記事のうち、凡ての境遇、凡ての場合に於て、即ち公の生活と私の生活とを問はず、成效の光輝と失敗の暗黒とを問はず、友人の家と仇敵の面前とを問はず、生に於ても死の最後の大きな試練に於ても、耶穌の爲し給うた所語り給うた所を知ることが出来る。そればかりでなく、此等は皆歩みを誤らず又言を失はず、要するに決して完全を欠かない人格の詳細な描寫であることを認むることが出来る。斯かる描寫は必ずや眞正の肖像であつて、理想的の繪畫でないことは勿論である。かくて吾人の批評以上のものは又齊しく吾人の想像以上のものであることを知る

のである。沈着にして敏捷なジョン・スチュアルト・ミルは「福音書に示された基督は歴史的存在であるまいとか、其の嘆美すべき記事の或る部分は弟子たちの傳説に由つて附加せられたのではないかと云ふやうな疑問は畢竟無用の議論である」と云つて居る。且つミルが進んで「誰か弟子たちのうち若くは改宗者のうちに（ミルは又世界の詩人や戯曲家のうちにと附け加ふべきである）、耶穌に歸せられたやうな言を發明し、福音書に記されたやうな生活と品性とを想像することが出来たであらうか」と問うて居るやうに、かゝる疑問は全然之を出す必要はないのである。藝術的感興は美しいものである。されど藝術的感興が、第一世紀に於て、猶太人たる四人の記者をして其の想像を用ひて一様にかゝる完全な人格の色彩を描寫せしむるほど、前代未聞の高潮に達したと云ふが如きは、全く無意義の事であつて、又不必要の事である。然かも彼等がかゝる描寫を爲すことが出来た唯一の理由は、想像からでなく實際から之を描出した

と云ふの外はないのである。彼等是一個のモデルを有つて居つて忠實に之を描出したのである。そうして描寫の完全なのは畢竟モデルの完全であつたことに因り、又描出の忠實であつたことに因るのである。されば耶穌が如何に承認せられたかと云ふ研究に於て、吾人は先づ彼が罪人でなかつたと云ふ、驚くべき最初の解答に接するのである。耶穌は實に罪人でなかつた。是れはやがて彼が人類中最も賤しい者の友であつたが、又其の最も善良な者最も偉大な者と、全く撰を異にする範圍内に在る、不可思議な孤獨を吾人に告ぐるものである。耶穌の眞の地位を了解するの困難は、何人も彼と共に實際上比較さるべき位置に立つことが出来ないからである。彼が人々の想像に與へた印象は、他に誰も之を與へ得ない程度のものである。吾人は本能的に普通人物の群れのうちに彼を置かない。孔子に始まりてゲテに終つて居る人物表中に耶穌の名を見ることは、正統的信仰に反すると云ふよりも、寧ろ精神上

の謹嚴を破るの感が多いのを免れない。耶穌は確かに世界の人物群中の一人でない。試みにアレキザンドル大王、チャールス大帝、ナポレオンなどの名を擧げて見るに、普通の意義からも、耶穌は到底此等の人物と比較すべきものではないのである。彼は偉大でなく唯一である。彼は單に耶穌である。之れより他に何を彼に附加することが出来ないものである。

耶穌の孤獨は二様に、或は寧ろ二つの程度に觀察することが出来る。第一、彼が道徳的經驗を漏らす有様は全く他の人と相異つて居る。彼は甚だ精密に人の胸中に在る罪惡を指摘するけれども、未だ嘗て自己の罪惡を懺悔告白したことがない。彼は罪に沈んだ人に對つて切に友情を示したけれども、未だ嘗て己れ自身かゝる境遇に在るやうに語つたことがない。彼は人類最上の良心と爲つたほごに道徳上の感覺が鋭敏であつたけれども、然かも自ら進んで彼の罪跡を擧げ示すやうに仇敵に對つて挑戦することを恐れなかつた。凡べて此等の事は

彼が嘗に「罪人を離」るゝばかりでなく、又所謂聖徒とも大いに違つて居ることを表はす特徴ではないか。彼等聖徒は新生活に入らんが爲に、皆熱涙と祈禱とを以て悔い改めの峻阪を攀ち登り、そうして漸く其の所謂聖境に達したものである。「詩篇」は實に之を證明するものである。アウガスチンの「懺悔録」及びトーマス・ア・ケンピスの「基督の模倣」も又同じく之を吾人に語つて居る。心が純潔で謙遜な人々も又同様の告白をしないものはない。されど耶穌は毫も斯かる告白をしないのである。

且つ耶穌の道徳的孤獨に關する第二の點は斯かる消極的のものでない、更に積極的のものである。耶穌は未だ嘗て道徳的の不完全と缺乏とを示されたいばかりでなく、却つて自ら他の缺乏を補給する者であると思はれた。是れは既に略ば前章に於て論じた所であつて、誰も之を拒む者がないから詳細の説明は要らないと思ふ。よし之を説明しても其の説明たるや次の簡單な數語に及ばない

のであらう。「人若し渴かば我に來りて飲め」、「凡べて疲れたるもの重を荷へる者は我に來れ、我れ汝等を息ません」。是れは皆道德上の切迫を感じないばかりか却つてかゝる切迫を補助しやうとする人の言である。他は皆迷つた羊である。されど彼は迷つた羊でないばかりでなく牧羊者である。他は皆病者である、されど彼は健康者で且つ醫師である。他の生活は皆奪はれたものである、されど彼の生活は己の所有であつて又他の爲めの賠償である。他は皆罪人である、されど彼は罪人でないばかりでなく、救主である。

此等は公明熱誠な人々が深く感ぜざるを得ないものであつて、人性の全體を通じて斯かる事實はないのである。是れは決して正統神學の誇張的教義でもない、實に近世批評學の結論である。宗教學者間に於ける近頃最も著しい徴候は大凡二千年前に生活した耶穌に關する研究の盛んなことである。基督教の盛んであつた過去の世紀では、耶穌の個人的肖像が見失はれ、其の人間の容貌は神

秘的信仰の雲に遮られ、或は教義の覆被に掩はれたのであつた。羅馬教會にて恍惚たる信仰者の渴仰を得たものは、苦悶に沈んだ耶穌の顔色の美はしい幻影に過ぎないで、昔ガリラヤに於けるやうな生活に至つては、殆ど當時の思想と生活とに何等の燦然たる光輝を加ふるものがなかつた。又プロテスタント教徒に對しては、彼は人の子であるよりも寧ろ或る要職を執行する職掌的人格と變つてしまつた。されど現代の人々は新しい熱心を以て、常に宗教の名に於てばかりでなく、又歴史の名に於ても「我等耶穌に見えんことを願ふ」と云ふ舊い要請に立ち返つた。過去半世紀の間、殆ど智識の各方面に大なる影響を及ぼした歴史的研究の精神は、基督教の研究殊に耶穌の生活、品性及び人格の研究よりも更に勝れて注目すべき影響を及ぼしたものはないのであらう。各種の見解を以て著はされた耶穌の傳記は夥しく出版せられ、批評的研究は其の歴史の方面に全力を費し、耶穌の教訓や事業や經歷や人格などは空前の熱心を以て研鑽せ

られ咀嚼せられたのである。其の結果は事々しく云ふ必要はないけれども、嘗てパレスチナに生活した耶穌は、その後の時代よりも一層明瞭に理會せらるゝやうになつた。さうして耶穌の怪異な神秘的孤獨は到底認容すべきものでないことが明かになつた。されど近世批評家の眼中にも耶穌は猶ほ比ひのない非凡な人格であつた。余は其の實例としてカイムの大著「ナザレの耶穌」を挙げやうと思ふ。彼は常に其の主題が全然超自然的であることを感ぜない譯にはゆかずして屢ば自然論的豫想の制限外に逸し去らんとするものである。少なくとも他人に無いものが耶穌にある。益す精密に耶穌を知るに従つて吾人は愈よ此の感を深くする。耶穌は吾人の分解の及ばない處に在つて人性普通の典範を破壊し批評を施すにも施しやうがないのである。チャールズ・ラムは「若し此の室内に入つて來る者がセエクスピアであつたならば我等は彼を迎ふる爲に席を讓るであらう。若し此の人（耶穌）であつたならば我等は其の足下に伏して其の禱

に接吻するであらう」と云つた。此の言は眞に嚴肅な態度を取つて耶穌の人格を研究しやうとする學者たちの胸中に於ける深い感情と共鳴するものである。されどかく説いて來て決定すべき疑問の眞の解答を見出したと思つてよいかどうか。耶穌の品性は固より汚點のないものであらう。其の人格は固より人性幾多の現象のうち不可思議な孤獨を表はすものであらう。彼は固より普通道徳を超越して居るばかりでなく、其の周圍に居る者の缺乏を補ふ者であらう。されど此等は遠き昔の事で、疑問は依然としてまだ解決せられないのではないか。此等は悉く驚くべき事ではあるが今日の我等に取つて果して如何程まで適切な宗教の基本となることが出来るか。宗教の基本は元來靈魂の中に活きて現存するものでなければならぬ。然るに是迄耶穌について論じた所は皆歴史的事實であつて直に之を宗教的と爲すことは出来ぬ。基督の事實は歴史的事實である。されば此の事實がさうして前章の主張のやうに個人的、心靈的宗教の基本を包含

することが出来るか。此等の點は尙ほ指摘しなければならぬ。之に對する答は他にない。此の歴史的印象をば其の結局まで推し究むるの目的を以て、猶ほ深く耶穌に就いて思考することである。吾人は基督の事實を熟思するとき此の事實は吾人の所決を促すばかりでなく、吾人の所決が又宗教的となることを悟るのである。吾人は既に歴史の冷な紙上で斯かる汚點のない人格を見出すことが出来た。吾人の良心は之に由つて驚くべきほどに吾人を捕へ、且つ未だ嘗てなき状態に於て、吾人が道徳上果して如何なる種類の人物に屬するかを悟らしむる。吾人は歴史の福音、即ち道徳的欠乏に在る者は彼に聽き彼に來れとの耶穌の宣言を讀むと共に、此の要求に對して最後の決定を爲すべき位置に立つて居ることを益す深く感ぜない譯にはゆかぬ。是れは實際宗教であつて、斯かる感動の起つて來るのは正しく基督の事實に由るのである。果してそうであるならば、かく道徳的、宗教的に變りゆく耶穌に關する吾人の思想は

一體如何なる徑路を有つて居るのであらうか。今少しく之を論じなければならぬ。今や吾人は次のやうな事を發見した。此の基督の事實が良心と意志に於て公平に熟思せらるゝならば、必ずや大なる道徳的結果を吾人の内心に惹き起さずしては止まないと云ふ事である。單に耶穌の模範若くは教訓の或る點ばかりが吾人の義務を教へ、吾人の缺點を明かにするのではない、否、遙に其れ以上のものがある。即ち吾人の道徳生活及び品性の全體に關する問題が之に由つて惹き起さるのである。斯くて基督の事實は單に歴史上の事實であるばかりでなく又實に良心の事實である。基督の事實は吾人の道徳性を捕へ、之を整理し之を詰責し、思想や感情や意志の根柢に於て吾人の生活を吟味する權威ある檢閲者である。不思議にも吾人は之を回避するの力がなく且つ著しい權威を感じるものである。吾人の感情、意志、良心を開いて基督の歴史的事實が與ふる印象を公

平に承認するに従ひ、其の印象は内心に於て益す道德的結果を生ずるのである。吾人は最初智識的に耶穌を驗證しやうとしたが、今や彼は却つて心靈的に吾人を驗證しつゝあることを發見する。彼と此との位置此に至つて全く轉倒し、耶穌に關する歴史的、智識的疑問がまだ其の終結を告げないのに、更に一層緊要にして切迫した疑問が其の間から起つて來て、吾人自身に關する直接な道德的問題となつた。是れは單純に福音書を讀む者の自ら認めて眞實であるとする所であつて、實に特異な現象と云はねばならぬ。吾人はアリストートルを讀んで智識的に得る所が多いけれども、耶穌を研究するときは全く之れと異つて、最も深い心靈上の煩悶が起り、「汝は基督について如何に考ふるか」と云ふ道德に左程の關係がない淡泊な歴史的疑問は、忽ち變つて「余は彼に對して如何に行動しなければならぬか」と云ふ最も個人的な又實際的な道德上の疑問となるのである。且つ此の疑問は益す吾人の解答を促して止まないものである。

吾人は今や歴史上の人物に對して頗る奇異なる事をしなければならぬやうになつた。吾人は耶穌に關し、餘儀なく、感情意志の或る道德的態度を取らなければならぬやうになつた。更に明白に云へば、吾人は今現に斯かる態度を取りつゝあるのである。吾人は到底之を避くるの途がない。智識上に於ては、人或は不偏不黨の態度を取つて耶穌を研究することが出来るであらうけれども道德上に於ては決して中立の態度を取ることが出来ないのである。耶穌の言語品性、人格が忽ち斯かる結果を吾人の内心に惹き起すときは、吾人は最早未曾て此の事に出で遇はない者のやうな振舞をすることが出来ない、且つ又之を擲つてしまはうとすることも出来ないものである。然りかく一たび提起せられた疑問は到底之に答へなければならぬ。たとひ之を不問に附せんと思つても、そのやうに思ふ事が既に其の答である。是れは余が耶穌の事實に對つて到底何れかの態度を取らなければならぬと云ふ譯である。耶穌に伴ふ感動と權威と

を歓迎し、之を熟思し、之に服従しやうと思ふのか、或は之を避け、之に抵抗しやうと思ふのか、此の二つのうち孰れを取り孰れを捨つるも、之を決するは最早吾人の避け難い問題となつた。如何に口實を設くるとも、吾人は既に之に答へつゝあるのである。さうして其の答は道徳上吾人の現在と將來とに對つて重大な結果を來すものであつて、實に善惡の間に横つて居る悠久な戦争の一方を味方として撰擇するの大事件に出で遇つたのである。此に至つて吾人の面前には所謂善惡の戦争があつて、最早敵味方を知らない軍勢の「あやめも分かぬ闇の夜」の亂戦ではないのである。こゝに相接觸した真面目な個人的大争闘がある。吾人は己が旗色を鮮明にしなければならぬ。吾人と耶穌との避け難い遭遇は遂に此處まで吾人を携へて來た。吾人はもと平靜な研究を以て始めたが忽にして道徳的決意をしなければならぬ戰場に呼び出されたのである。少なくとも吾人の或者は激しい戦争の後でなければ容易く敗退しない強敵と争はね

ばならないやうになつた。初めは耶穌に關する疑問を以て始まつたものが、今や一變して吾人自身に關する疑問となり、其の答は全く彼に對する吾人の態度如何を表はすものとなつてしまつた。單に態度と云ふと意義或は不明瞭であるを免れ難い。さらば此に所謂態度とは何であるか。それは最も實際上の事に屬するものである。されば既に形式となつた宗教上の習慣語を遠けて實際生活の一二見易い事實に對するときは、其の意義が思つたよりも遙かに明瞭となるであらう。耶穌の感化の下に吾人を導き至らうとし、或は誘ひ去らうとする實際生活、即ち思想及行爲の撰擇の方針は決して曖昧を容さない。吾人は彼に近づきつゝある時を知り、又遠かりつゝある時を知る。各個人の生活には事の大小を問はず、道徳的撰擇をする際、必ず面前に横はる岐路がある。耶穌の事實が真面目な道徳的結果を生じ、自ら良心の事實と爲るに際して、故意に之に従ひ行くことを拒み、或は之に關し

て何事か起り來るとき、故意に其の聲の更に明瞭な處、其の感化の更に力強い處に導かないやうな路に進み入ることも出来る。かゝる人に對しては、基督教の最も肝要な事實も單に外部的な歴史上の事實たるに止つて、毫末も宗教の根本を其の中に見出すことが出来ないであらう。されど又他の方面を取つて進むことも出来る。耶穌の言には、人を招き寄するものがあり、その心情には人を教誨するものがある。されば勇しく卒直に前者と異つた路を撰擇するならば、即ち惡事に戀々たるやうな素心を去つて誠實に撰擇することが出来るならば、基督の事實は眞に宗教の事實となり、基督教はかくして其の意義と形態とを併せ有するものとなるのである。最初は歴史上及び批評學上の耶穌、次に良心及び道德的感動と撰擇の耶穌は、今や心靈上の約束と平和を與ふる内部的經驗の耶穌となり、耶穌の名は特に最善の我、眞實の生命と同一であるやうになるのである。斯の如く耶穌は人の眞生命である。使徒保羅の所謂「最早我れ生けるに

非ず、キリスト我に在て生るなり」と云ふ言は從來云ひ過ぎた言であると思つた者も、驚き且つ怪みて其の眞意義を發見したことを喜ぶであらう。是れは事實である（こゝには唯その事實であることを示すに止め、後章に於て更に詳細に研究することとしよう）。是れは實に心靈上の活ける眞理である。決して死んだ過去の歴史ではない。されど又同時に歴史である。此の事實は基督の歴史的事實から産れ出たものである。決して抽象的思想若くは原理に溯るものではなく實際的現象に基くものである。耶穌に就いて思考することは管に歴史上の見解を吾人に與ふるばかりではない、又信仰の基本をも與ふるのである。此の事實は歴史に始まり、發達して良心の事實となり、遂に宗教的經驗に到達する。且つ此の事實に宗教を建設することの出来るものであつて、吾人は基督教の舊い地盤が今日も猶ほ有效であることを見出すのである。以上論述した所は基督の事實である。即ち歴史、良心及び心靈的經驗の事實

である。此の基督の事實を論述するに當つて、吾人の最も注意しなければならぬことは、完全に之を論述することであつた。若し二千年前のパレスチナに於ける耶穌の生活言行などに關して記さうと思ふならば、余の記述は固より完全とは云へない。されど耶穌に關する事實は唯こればかりではない。彼は實に歴史上の過去の事實であるよりも更に以上の事實である。彼は個人の經驗中に活躍する所の事實であつて、初は單に歴史的現象であるけれども、漸次意識上の事實となり、内心の糾問、招致、約束、及び革新として、特殊な状態に於て再現する所の現象となるのである。さうでないならば、讀者諸君は決して基督に對して眞正の判斷を下したのではない。諸君は此の二つの要素を承認するでなければ、實際上未だ基督の誰であるかを言明し得たものとは云はれぬ。此の二つの要素のうち其の一を缺かば決して完全な記述と云ふことが出来ぬ。近頃の一著者は『心靈上の基督と歴史上の基督と二つのうち其の一を排斥し去つて他の

一を重視するならば、其の結果は悉く眞を失つた畫像となるのである』と云つて居る。されば吾人若し基督の事實の上に基督教を建設しやうと思ふならば、決して顛倒した描寫をして此の事實の一方ばかり偏つてはならぬ。此の事實は二種の意義を有つて居る事實である。基督教の據つて以て立つ所のものは、齊しく歴史と經驗との事實であつて、基督は即ち其れである。吾人は此の二種の形相を忘れてはならぬ。或は昔し死去した教師と其の教訓とを論ずるの心を以て只管に『歴史上の基督』を固執し、或は歴史上の耶穌の誰であるかを介意せずして、唯『經驗上の基督』のみを論述するときは、廣く且つ確かなる基礎の上に基督教を建設することは決して出来ないものである。基督教の基礎は基督である。彼れ若くは此れの上に建設すべき二つの基督があるのではない。唯一つの基督があつて、外部の歴史と内部の經驗とに彼を見出すのである。されば吾人の基

督教は必らず完全な基督の事實の上に建設しなければならぬ。教授デニは「基督教は唯過去の基督の誰であつたかど云ふことばかりでなく、又現在誰であるかど云ふことに關して解答を爲たものである」と云つて居る。要するに基督教は歴史上の事實であつて又經驗上の事實である基督に關する宗教である。斯くて吾人の研究は進むに従つて益々明瞭となつた。最初吾人は本來の基督教は神學的若くは倫理學的思想でなく耶穌自身の人格に基くべきことを豫想した。然るに研究するに従つて、愈よさうであることを發見した。更に進んで、吾人の基督教は此の地盤の上に建設し得らるゝかどうかを試験したが、又果してさうであることを確めた。何となれば、此の事實は大凡二千年前の歴史の出來事であるに拘はらず、今日に於ても良心と道徳的生活及び經驗との事實であつて、吾人にとつては現在生きて居る眞理即ち宗教の本源であることが出来るからである。斯くして吾人は權威ある地盤を見出したばかりでなく、此の地盤

の上に基督教を建設し得ることを見出した。されば吾人は進んで其の建設に従事しなければならぬ。詳言すれば、此の事實中に果して宗教に關する何事が包含せられて居るか、之を驗證し、之を排列し、且つ之を明白にしなければならぬ。吾人は今や基督の事實の意義に對つて研究の歩を進めんとするのである。

扱て此の研究を始むるに當り、一事の明かにしなければならぬものがある。さうして之を承認すると否とは、吾人の研究の成功に關係する所が多い。吾人は完全な基督の事實を研究しなければならぬこと、此の事實が外部の歴史と内部の經驗とに關するものであること、は既に云つた如くである。さば斯かる事實の意義を研究するに必要なものは理智以上のものでなければならぬこと、又明かである。合理的研究は其の一方面である歴史的事實を攻究するもので、博識な學者の助けから得らるゝ凡ての智識は勿論歓迎しなければ

ならぬ。されどそれは基督の事實の全體ではなく、又基督教の完全な基本でもない。此の事實は良心の事實であつて、その基本は又道德上の糾問、撰擇、約束及び經驗をも含むものである。若し基督の事實が一方面から諸他の歴史的問題と同様に智識上の僻見を棄つべきことを要求するならば、又他の方面から正しい良心と正しい意志とを要求するのである。されば遺憾なく基督教の研究をしやうと思ふ諸君は、二種の形相を有する此の事實の性質上、宜しく批評的智識と共に又批評的智識以上のもの、即ち道德的印象と命令とに服従する良心と意志とを以て従事しなければならぬ。諸君にして基督教の何たるかを知らうと思ふならば此の二つの方面に於て虚心坦懐であるべきである。基督の事實に關する諸君の研究が或る歴史上の要點に達したときは、諸君は之に對つて公平な心を示さなければならぬ。されど若し諸君の研究が或る道德的撰擇と招致とに諸君を導き至るときは、諸君は前と同じく公平な意志を以て之を承認しなければ

ならぬ。是れは内外二種の形相を有する問題の性質上既に明白である。されば吾人は先づ次の事を明かに理會しなければならぬ。若し道德的に之を回避し、或は之に對つて不正直な意志を蓄ふるやうなことがあるならば、吾人は決して基督教の何であるかを悟ることが出来ないであらう。且つ基督の事實、即ち基督教の基本を有する基督の事實は、歴史上の事實であつて、同時に又良心の事實であるが故に、既に云つた所が必然の道理であることをも理會しなければならぬ。斯くして吾人は道德上並びに智識上公平に此の事實に對しなければならぬ。嘗に歴史の事實に對して虚心であるばかりでなく、道德的結果を生ずるやうな誠實な意志を以て之に對しなければならぬ。然らざれば吾人の研究は其の出發點に於て既に失敗に歸する運命を有つて居るのである。此等の事を主張するにも、吾人は猶ほ宗教の大教師たる耶穌の研究法に従つて居るのである。何となれば耶穌が「眞理を識る」ことの出来る約束を與へたる者は、卓出した智

識を有ち、歴史に該博な人々よりも、特に「彼の旨に従ふもの」であつたからである。

第三章 基督の事實の最初の意義

抑も基督の意義は深く且つ大なるものである。世界歴史と個人的經驗との樞軸である斯の如き事實は、確かにアリストートルが所謂拙作な劇の挿曲でないのは明かである。人類の歴史が果して意義があるならば、又心靈的經驗が果して意義があるならば、基督の事實は必らずや意義がなければならぬ。且つ斯の如き大なる事實は又大なる意義を有て居らなければならぬのは勿論、終に至つて充分に説明し難く又云ひ表し難い點があるのを見出すのは敢て驚くに足らないのである。

一體基督の事實の意義に關する問題は漸次發展するものであつて、其の解答の端緒を開くには左程の困難がない。基督は少なくとも直接な平易簡單な意義を有つて居る。若し其の最初の意義は道徳的生活及び品性に關するものであると

云つたならば、それは多數者の心中を道破し得たものであると信じても不可
はなからう。

附註——基督の事實が人心に接觸して其の意義を深めゆく途は勿論種々相異

つて居る。或る人には最後である意義も、屢ば最初であつて直接な意義とな

ることがある。されど之を論述するには何れかの順序を擇ばなければなら

ぬ。さうして余が此處に擇んだものは普通には自然で論理的であるやうで

ある。且つ個人的経験の相伴はない人々にも理會し易いやうに思はるゝ。

是れは先きに基督の事實を述べたとき、既に略ぼ明かにした所のものである。

吾人は既に耶穌が理想的で高尚な汚點のない人格であることを歴史的に發見し

又良心の内部に於て力ある個人的の道德的權威であることを發見した。基督の

事實に對つて心意と良心とを鎖さない人は、謬も、自己の一層善良な人となら

なければならぬ責任を感じ、自己と基督との關係が永續する間は益す自己の

品性の發達すべきことを感じ、且つ未だ會てない有様に於て、自己の缺點を教
へられ自己の義務を明示せらるゝことを感じないものはないのである。基督の
事實が他に如何なる意義があつても、以上の意義を有たないことは未だ會てな
いのである。且つ他の意義に對する熱心を名として此の意義を没却しやうと試
むるは明かに假托である。基督は讀者諸君に對つて確かに次のやうな意義を有
つて居る。諸君は新しい標準を以て自己の生活と行爲を再閱し、且つ生活と行
爲の新しい理想を自己の面前に置いて之を實現しやうとする者である。此の意
義にして感ぜらるゝとがなないならば、それはまた基督の事實に對せず又對する
ことを好まないものと云はねばならぬ。歴史に於ける耶穌の模範と經驗に於け
る耶穌の權威とは齊しく以上の意義があることを示すものである。かくて吾人
の品性に關する問題は直に基督の意義の一部分として基督教のうちに起つて來
るのである。されば基督教は他に如何なる意義があるにもせよ、新しい品性を

吾人に提言し且つ之に達するの途を教ふるものである。これがないならば他の意義も無益である。吾人は今此の二點に就いて少しく考察しなければならぬ。されど之を考察するに當つて、此等の要素が耶穌の宗教に於て如何ほど顯著で且つ有力であるかを細かに觀察するの必要がある。宗教と云ふものが元來人の品性に關するものであることは明かな事である。されど當時基督教の福音が新たに進入した羅馬の天下は實際大に之れと相反するものがあつた。羅馬の文明、即ち或る點は今日の文明よりも進歩したと云はるゝ羅馬の文明に於ては、宗教は全然道徳と分離した状態であつた。希臘及び羅馬の祭司、巫術者は人を清潔な生活に導くことを己が義務の一部分であるとは瞬時も氣附かなかつた。公私の生活は無情極まる殘酷な所業と殆ど想像し難い放縱な惡徳とに沈淪して居つたけれども、宗教は敢て之に對つて抗言しないばかりでなく、却つて其の巫術は最も汚れた不義不正を庇護し、其の祭司は之を許容したのである。當時の

哲學者又道徳家であつた人々が、基督教の隆興に少しの注意をも拂はなかつたのは最も不思議な事實であるけれども、歴史家レッキーが指摘したやうに、宗教と道徳との全き分離で以て容易く之を説明することが出来る。基督教が、神學を離れて、單に倫理的系統としても、眞面目な人々の注意を惹いたであらうとは誰も推測する所である。されど道徳上の事に最も熱心であつた哲學者たちは是れは宗教ではないか道徳的生活に關して宗教が果して何を爲し得るかと云はぬばかりに、ブルターク、セネカ、マアカス・アウレリユウスのやうな人々も無雜作に論じ去つて、歴史上最も卓絶した道徳的現象が眼前に現はれたことを悟らず、唯僅かに一瞥を與へたばかりであつた。此等の人々は基督教が宗教の範圍目的に關する彼等の豫想を毀つものであることをどうして知ることが出来るやう。又基督教が道徳と最も密接に結合し、特に世人に對つて新しい道徳的品性を意味するものであることをどうして知ることが出来るやう。若し此等の人々

の心中に少しにてもかゝる思想が起つたならば、セネカの如き其の書中に基督教と殆ど同一の教説を説きながら、一言も基督教に云ひ及ばない道理があらうか。又人類の歴史は、マアカス・アウレリウスのやうな人が耶穌基督の徒を迫害するやうな「最も悲劇的な事實」を記すことを免れたであらう。されど今は暫らく之を措いて基督教が世界に齎した新しい品性は果してどういふものであるかを研究しやう。

第一 基督教的品性

基督教的品性の規範は勿論耶穌自身の品性である。彼が「活ける律法」であることは實に古への辯證家ラクタンシユスが云つた如くである。故に吾人は第一着歩に於て基督の品性の特異點につき正確な印象を得なければならぬ。余は此處に特異點と云つた。それは勿論基督には必らずしも基督教的でない、例へば勇氣、眞實、忠信などの性格があるけれども、之を論ずるの必要はないと信

するからである。吾人の目的とする所は耶穌が世に示した品性の各方面を辯論しやうとするのではない。唯吾人が呼んで特に基督教的と云ふべきものを知らうと思ふのである。吾人が今觀察しやうとするのは唯是ればかりである。

余は耶穌の品性に次の如き四つの特異な要點があると思ふ。

(第一)は純潔即ち神聖である。余は之を特異點と云ふ。何となれば既に云つたやうに耶穌は全く汚點のないばかりでなく、際限なく此の語を使用して差支のない唯一の人格であるからである。基督教以外の道德的俊傑のうち、世の尊敬を受け、卓出した徳行のある者も少くないけれども、其等の人々に對つて、不純潔の思を抱くは蛇蝎視すべく、又少しでも惡の兆候があると想像するは甚だ畏縮するに堪ふると云ふべき程の者はないのである。否、嚴然として惡徳を排斥し、烈火の燬き盡すやうに之を滅さんとする感情を道德に注入したのは實に耶穌其人である。燦爛たる光輝を道德性に與へ、遂に之を白熱に至らしめ

た者は實に耶穌である。さうして吾人が純潔と呼ぶ所の徳、即ち罪惡の兆候に對する斬新で、熱切で、鋭敏な感覺は、彼に由つて始めて人の品性の理想に入つて來たのである。彼は徳をば人心の内部的革新の感情である全然新しい或るものとした。彼は「神よ我が内心を潔め給へ」と祈ることを教へた。之を譬ふれば、山間の泉水に枯枝朽葉などが悉く沈澱してしまつて、清冽透徹底に到るまで唯天の麗光を反映するやうな有様である。耶穌以外の罪に汚れた人々に誰か斯かる徳の思想をば暗示した者があるか。又之を實現すべき途を誰が指し示したか。「心の清き者は福なる哉、神を見ることを得べければなり」とは實に彼自身の經驗から云ひ出したものでなければならぬ。

(第二)の特異點は愛である。是れも又純粹な基督教的意義に殆ど耶穌の創始したものである。眞の愛がどんなものであるか、又人類生活に於てどんな位置を占むるものであるかを知るやうになつたのは、實に耶穌が世に來てからのこ

とで、其の以前には未だ曾て眞に之を理會した者がなかつたのである。是れは決して耶穌を離れた人性が、全く愛の觀念を有たなかつたと云ふのではない。されど耶穌は之を推し擴め、之を強め、之を高めて、實際上新創の意義を有つやうにしたのである。それまでは、愛には制限があつて、プラトリーのやうな世に崇敬せらるゝ哲學者すらも、外國人に對する「變造なき嫌惡心」を賞讃したのである。希臘人には外國人と云ふ名は野蠻人に同じく、羅馬人には仇敵に同じかつた。古代人は毫も愛の範圍の普通であることを知らなかつた。耶穌に至つて初めて愛が人類のものであることがわかつた。それまで、「ボルチ」や「アカデミー」に於て思想されなかつたものであつた。耶穌は愛の觀念を推し擴めたばかりでなく又其の意義を強めたのである。ストイックの派の哲學者は往々同胞主義の觀念に到達したと云はるゝ。されど耶穌の懷いて居つた同胞の愛はストイック派の夢想だもしない新しいものであつた。人々相互の關係についての其

の見解は如何に善美であつたにしろ、それは熱からず冷かならざる論理に過ぎないものであつた。彼等は實際慈悲心にも富んだであらうけれども、それも又極めて恬淡な抑制的のものであつた。されど耶穌が人を愛するのは熱氣があつて衷情から溢れ出で、其の活動は胸中の血を躍らせつゝあつたのである。一たび人を愛するときは纏綿として忘るゝことが出来ず、その爲めに祈り、その爲に勞し、終にその爲めに死んだのである。是れは實に新しい愛であつて、クリスマスの寒風裡に夏日の温熱が來たかの如くに地上に降り來つたものである。爾後其の温熱は未だ曾て人の心胸を去つたことがないのである。愛を普遍的に又切實にした耶穌は又之を生活の最高律としたのである。犠牲献身の氣高い行爲は多く歴史上に散見する所であるけれども、彼は愛を以て律法とし、凡ての生活の準據すべき原則としたのである。愛することは彼の生命であつて、愛の外に生命てふ生命は彼の有たなかつた所であつた。彼は即ち愛であつた。斯の如

く耶穌は愛の觀念を革新し、創始的に之を推し擴め、之を強め、之を高めたのであつた。天下に未だ曾て此の種の愛を見ないのである。凡ての人に對つて凡ての事を爲さしむる生活の最高律である此の種の愛が、人の品性の理想に其の位置を占むるやうになつたのは、實に世界に愛の名を再造した耶穌に濫觴するど云つてよいのである。

附註——愛と云ふ語は今日では最も高尚な意義を有て居るけれども、古代文學上の用法は大に趣が異つて居る。されば第四紀に於て、ゼロームが「ポルゲト」(拉丁譯聖書)を譯する際に、基督教的愛を表明するに「アモル」(愛)と云ふ普通語を用ふことが出来ず、「カリタス」(愛)と云ふあまり普通に通に用ひられない語に依頼するの止むなきに至つた。是れからして欽定英譯聖書の「チャリテイ」(愛)と云ふ語は出て來て居る。

(第三)の特異點は宥恕である。是れは愛から出て來たものであるけれども、

又別に掲げて論すべきものである。何となれば耶穌が道徳上に施した最大の革新でないけれども、多分最も特異な革新であるからである。基督以前に在つては、宥恕に關する一般の感情は都督官スラの爲に羅馬の「カムバス・マシユウス」(擲所の名)に建てられた有名な碑石の銘であるとして、ブルタークが傳へたのを見ても知ることが出来る。云はく「朋友の余に爲した善事も、仇敵が余に加へた害悪も、共に利息を附けて報いないものはない」。宥恕は觀念として古代の人々が知らなかつたのではないが、實際は誰も之を實行し得たものがなかつたのである。之を實行して効果があるやうにしたのは獨り耶穌ばかりである。彼は決して憤怒の情を蓄へず、人の悪きを思はず、和解し難い深仇の念がなく、瞬間も復讐の心を懷いたことがない。又彼はいたく羅馬の百夫の長を驚かし、遂に彼をして禮拜せざるを得ざらしめた「父よ彼等を宥し給へ、其の爲す所を知らざればなり」との、かの十字架上の祈の精神を以て日々行動したのである。

是れは實に驚くべき革新ではないか。此の宥恕の律法に關して「エクセ・ホモ」の著者は「是れは基督教道徳の全體、少なくとも根本として一般に考へらるゝやうになつたほどに偉大な感化を人心に及ぼした」と云つた。又「基督教的精神について語るときはいつも宥恕の精神を指して語るものであることを注意せよ」と云つて居る。

されど此に猶ほ耶穌の道徳的品性に關する(第四)の點があつて、他と齊しく特異なものである。即ち謙遜である。此の品性の特に基督教的精神であることは事々しく云ふの必要がない。異教國に於ては謙遜に似て居る徳は皆悉く輕蔑せられ、且つ最善なる倫理學派の諸徳は自尊を以て其の基礎として居る。耶穌の謙遜は前に掲げた他の品性と同列に置かねばならないほど必要な特色はないと思はるゝけれども、それは此の品性が耶穌の生活に於てどんな位置を占めて居るかを理會しないものである。勿論謙遜の徳たる自覺的のものではない。其の

能く謙遜であることが出来るが故に常に半ばは人目から遮られた美はしい花のやうなものである。さうして此の點に於て謙遜は常に自卑と區別しなければならぬ。自卑は中世紀の宗教が屢ば謙遜と同一視しやうとする傾向があつたもので、露骨と虚飾とに流れ易く、又屢ば流るゝものである。謙遜を發見しやうと思はば、恰もアルプス山中のアイデルバイス(白色の花を開く)のやうに、之を探り求めなければならぬ。されど耶穌に於ける如く完全なものを見出すことの出来るのは實に美の極みである。耶穌の謙遜は實に野卑な虚榮心と齷齪たる自己中心主義を離脱して居るばかりでなく、又實に賞讃に耳を傾けず、聲望の主人たる位地を羨まないばかりでなく、遙かに此等を超越して居る。若し萬世の師たる人があるならば彼は實に其の人である。されど彼の世に在るは恰も僕のやうであつた。若し天與の大教師があるならば彼は實に其の人である。されど彼はサマリヤの婦と共に費した午後の數時間をば空費したとは思はなかつた。且つ

貧しい者や無學な者や世の中から度外視せらるゝ者と共に送つた其の生涯をば徒勞とは感じなかつた。歴史上最高人格たる彼は、税吏罪人の友として最も善く最も適當に記載せられて居る。斯の如きは實に耶穌の謙遜であつて、之れこそ眞正な偉大の顯現とも稱すべきである。シイザル若くはナポレオンなどの傲然たる自我主義は、時として人心を動かすものがないではないが、彼等は世の人は皆土塊に過ぎない、唯凱旋の行列を賑はす爲に造られたものに過ぎない、己れ獨り殆ど別種の人であると考ふるの權利があると思つて居るやうである。されど耶穌が同胞人類より以上の位置を占むる程度は、此等の征服者が到底企て及ぶことの出来ないばかりでなく、彼は實に人類に及ぼす自己の勢力の性質を知つて居つたのである。曰く「爾曹われを師と呼びまた主と呼ぶ、爾曹の云ふところはよし、我は誠に是れなり」。此の言は驕慢な「世界を狭しとする巨人の濶歩」よりも遙かに吾人を動かすものがあつて、彼等に對するよりも更に數

層深い敬畏の念を起さしむるのである。耶穌は大なる勢力を有つて居つたけれども、謙遜な奉仕の精神を以て之を潔め、世界の主人であつたけれども、賤しい徒の間に住み、主であつたけれども、人に事へたのである。かく彼は人間生活の新しい眞の偉大を吾人に教へた。謙遜は彼の生涯に於ける至大の道德的勝利であつて、宥恕と共に又最も創始的なものである。恐らくは今日も猶ほ人々の心中に在つて其の品性に及ぼす新しい感化は、「柔和にして心謙れる」彼は學んだ精神と、彼の謙遜な「心を以て心と爲」した精神とを擧げ示すより外はないのであらう。何となれば基督教的品性の特徴である、此の徳を賞讃することが出來ないで、却つて之を非難する輩は、未だ基督教を信じない普通一般の人々に多く之を見るからである。アウガスチンは「基督教的訓練の殆ど總ての實質は謙遜である」と云つた。

純潔、愛、宥恕、謙遜、此等は耶穌の品性の四つの特異點である。歴史的に

耶穌の生活と教訓との記録からも、内部的に、耶穌が惹き起した道德的結果からも、此等の特異點を眼前に置かないでは誰も耶穌の事實に對つて何事をも爲し得ないであらう。基督教に此の他の如何なるものがあつても、眞に基督者となることは純潔な心を有ち、愛と宥恕の精神に富み、且つ又謙遜な人と爲ることに外ならぬ。耶穌の生活と品性とに關する此の道德的意義は決して之を拒み又之を避けることが出來ないのである。

到底之を拒み又避けることが出來ないとしても、吾人はどうして斯かる品性に達することが出來るか。口に純潔を説くは頗る容易いけれども、どうして誠實に我が心を潔くすることが出來るか。愛に就いて述ぶるとは愉快であるけれども、全く利己の念を斷つは殆ど出來ない業である。聲高らかに宥恕を論ずるは見事であらう、されど侮辱を受け損害を蒙つたときに之を忘るゝのは人の性質でない。謙遜を心に冀ふは難い事ではないけれども、眞に謙遜であるこ

とは甚だ難い。かく此等の事實を観察し、之を實驗しやうとすれば、容易でない。吾人は理想としては好んで此等を欽慕するけれども、確實に之を實行することは殆ど無能力である。吾人は恰も生活の平野に立つて純潔な愛、宥恕、謙遜の高峰を仰ぎて徒らに語るに過ぎない。一たび其の巔に攀ち登らうとして歩み出すときは、吾人の性質が甚だ遲鈍にして力がないばかりでなく、屢ば之に反抗するものがあることを見出すのである。眞に自己を知る者は誰も之を否定しないであらう。

されど實際は此等の高峰に多くの人々が攀ち登つたのである。基督教歴史の各世紀を閲すれば、耶穌は單に此の種の品性を世に示したばかりでなく、人の性質に存する實際上の反抗をも却けて、著し實行することの出来るものと爲したことが認められる。人々は此等の品性の何であるかを耶穌に學び、又能く之を自己の品性と爲し得ることをも學んだのである。基督教的品性たる純潔

愛、宥恕、謙遜は遂に云ひ消されないほどに人々の生活に實現せられた。吾人の多くは何も塗抹するとの出来ない基督教的品性と其の美しい印象をば、神聖な遺物として残し去つた人々の生活に於て見ることが出来たのである。此等の品性は自然のままの發達でなく、別に一個の事實である。

されば此の事實は特別の解釋を要するものである。抑も人々をしてかく純潔な愛と宥恕とに富み又謙遜の精神を懐かしめたものは何であるか。又吾人をして斯くならしむるものは何であるか。基督教的品性の理想で以て之を説明し去ることはまだ出来ぬ。さらば之を實現せしむる道徳的勢力は果して何處から來るか。吾人は又果して其督の事實に之を見出すことが出来るかごうか。

第二 道徳の原動力

多数の人々から敬愛されたヘンリー・ドラモンドの品性は、先きに云ふやうな基督教的品性に到達し得らるゝことを吾人に證明する著しい實例である。彼

は其の著「變化せる生活」と題する小冊子の冒頭に於て「若しこゝに何か大な勢力があつて、朝な朝な巻き上げる時計のやうな状態にて、常に眞理を思ひ正義を行はしめやうとすることがあるならば、余は直にそれに對つて抵抗しなればならぬ」と云ふハックスレーの有名な言を引照して「余は今次のやうな建言をしやうと思ふ、然り實に時計のやうになることがなくして其の目的を達することの出来るものがある」と云つて居る。是れは實に大膽な言である。基督の事實は能く此の言を辯護し得るものがあるかどうか。

此の疑問に答ふるに當り、深く注意して避くべきことは虚妄と過實とに陥ることである。歴史上の事實に就いて語るときは容易く此の過失を指摘することが出来るけれども、内部的道徳的勢力の問題に就いて語るときは之に陥り易いのである。如何なる事にも其の中に良心が存するのは勿論であつて、殊に經驗上の事に於てさうである。此等の問題に於て無責任の言を用ひ、或は事實上根

據のない斷案を下すやうなことは大に良心を辱しむるものであることを知らなければならぬ。

吾人が最初に問はねばならないのは所謂品性と稱するものに現はるゝ如何なる原動力があるかと云ふことである。此の間に對する吾人の答は明白且つ單純である。それは即ち吾人の撰擇若くは意志であると答ふことが出来る。或は又吾人を感動せしむる模範若くは嚴肅な命令の力であると答ふことも出来る。然し此等の答は普通の品性を思考するときには充分であるけれども、最も深く且つ高い品性の本源を尋ぬるには聊か不充分の感がないではない。されば基督教的品性の原動力は果して何處に在るか云ふ大切な問題に於てもそれが充分であると云ふことは出来ぬ。其等は純潔や愛や宥恕や謙遜を産み出す充分な原動力ではない。撰擇も意志も共に充分でない。何となれば吾人は屢ば使徒と共に「わが願ふ所の善は之を行はず、反つて願はざる所の惡は之を行ふ」こ

とがあることを承認しなければならぬからである。模範も又充分でない。何となれば吾人は屢ば羅馬の詩人オビドと共に「余は善を認め且つ之を喜ぶ、されど却つて悪を追ひ求む」ることを承認しなければならぬからである。基督教の理想とする道徳上の卓絶に達するには、單なる命令が効果のないのは猶ほ更明白なことである。されば吾人が尋ねる所の原動力は此等以外に求めなければならぬ。

さらば何處に之を求むべきか。若し撰擇や意志や模範や命令が最高最深の品性に達するに不充分であるならば、他に如何なるものがあつて之に達せしむることが出来るか。吾人の品性を作るものは吾人に存する靈（若くは精神と譯す、以下互用する）でなければならぬ。正確にこれが定義を下すことは固より困難であるけれども、余は實例に由つて其の意義を明かにすることが出来る。例へば愛心の如きは其れである。何ものが能く愛國的品性を作ることが出来るか。

るか。必ずしも高尚な理想として之を撰擇した譯ではない。必ずしもネルソンやウエリントンのやうな人物の事業行跡を模倣した譯でもない。又必ずしも政府や國家の命令があつた譯でもあるまい。縱令此等の諸の條件を伴つても、別に更に深い或るもの、即ち吾人の所謂愛國的精神が激發せられなければならぬ。先づ此の精神を作興し之を撫育せよ。さらば愛國的精神は既に存在して居るのである。且つそれが期せずして實際の生活に現れ来るのである。他の高尚な品性も亦同じことである。決して製造せらるゝものではない、又研究の結果に出づるものでもない。實に「靈に由りて生れ」たものである。靈（精神）から生れたものであるから又能く靈の要求する所を實行することが出来るのである。若し愛國的精神のやうな一つの品性に就いてかく云ふことが出来るならば、基督教的精神性に就いては更に強い語を以て同様に云ふことが出来る。愛國的精神は嘆賞すべきものである。されど如何なる手段に由ても達せられないほど高

尙なものではない。然し純潔や愛や宥怒や謙遜の精神に至つては頗る高尚である。吾人は此等の品性の外面にすら纒かに達し得らるゝに過ぎないのに、何人かよく斯かる變化を内心に誘起することが出来るであらうか。若し基督教道徳の理想の美しい花が吾人の足跡の及ばない高山の頂に開くならば、まして流るゝ光線を注いで此の花を開かしめる太陽にはどうして接近することが出来るやうか。吾人は基督教的品性の外面にすら達することが出来ないのに、どうして其の精神に達することが出来るやうか。されど先きに云つた所が眞實であるならば、此等の品性に達せしむる唯一の原動力は耶穌の靈(精神)であつて之を吾人の内心に作興し且つ之を撫育するの外はないのである。さらば如何にして耶穌の靈を作興するか。吾人は此に至つて恰も窮境に陥つたかの感があるのである。

されば此等を論ずるに當り、宜しく事實に對して誠實な心を有つる必要に

いて既に云つた所を記憶し、陥り易い道徳的綺語を離れ、歴史に記るされた確實な事實に研究の基礎を置くやうに努めなければならぬ。

先づ吾人の注意すべきことは、耶穌自身が人をして義に至らしむる唯一の方法として新しい靈(精神)の分與に深く留意したことである。彼は熱心な志道者の一人に對つて「人もし新に生れずば神の國を見ること能はず」と云ひ、之を靈的に即ち「靈に由りて」再認するの意味に解し、且つ其の教訓の第一義としたのである。斯の世に於ける耶穌の道徳的目的及び天職は單に道徳を教へ、模範を示すのでなく、彼自ら云つたやうに「聖靈を以てバプテスマを施す」のであつた。さうして彼が之に成効したことは、ヨハネや、ペテロや、マクダラのマリヤや、其他無数の人々が彼に接して己が性質を一變したのを見ても知ることが出来る。彼は新しい靈即ち彼自身に有つて居る純潔、愛、宥怒、謙遜の靈を彼等の衷心に注ぎ、かくして新しい品性を作り出したのである。

吾人は耶穌が實際此の世に生活した間には斯かる事實があつたことを悟ることが出来る。大人物の精神は之に親炙する者の精神となり、勇敢な者は其の傍に立つ者に勇敢の精神を鼓吹し、高潔な心は之に近づく者の心を高潔にするのである。人若し耶穌の驚くべき人格の何であるかを悟るならば彼に親炙して其の聲を聞き其の眼に觸れた者が、唯彼の言に感激したばかりでなく、實際性質が變化して彼の精神に一致するに至つたことを信ずることが出来る。ナポレオンが其の率ゆる軍隊にかゝる感化力を有つて居つたとすれば、まして耶穌が其の親しい友にかゝる感化力を有つて居つたと云ふことは頗る當然である。されどかゝる感化には自ら制限があつて、人の精神に及ぼす其の力は、必らずや感化の權威者が現前するの必要がある。元來かゝる感化は根柢から個人的であつて個人的要素の缺くる處には精神的感動も又隨つて枯凋するを免れない。故に大人物の個人的感化は其の死と共に消え失するの明かな事實である。其の感化

は彼と相知つた者の心に暫くは存するであらう、或は又後世の大な記念ともなり模範ともなるであらうけれども、此等は皆個人的感化の幻影に過ぎないのである。其の人は最早去つて世に居らない。吾人は他の新しい感動を索むるの外はないのである。

耶穌が斯の世に生存した間は、彼に親炙した人々の智情意に對して新しい靈(精神)を分與するの力があつたであらう、故に又基督教的品性を實現するの力を與へることが出来たであらうけれども、此等は皆暫くの事で、唯彼が個人的に人々の面前に現存した間はかりである。彼が一たび世を去ると共に、此の感化力も亦隨つて消え失せたことは吾人が豫想する所である。未だ曾て彼の顔を見ず彼の聲を聞かずに居る今日の人々に對して、新しい精神を分與することが出来やうとは思はれないのである。

されど其の實は大に之に反し、新約聖書及び道德史の最も著しい現象に於

て、吾人が屢ば出で遇ふ所のものは實に此の點である。

單なる歴史的記録と思はれて居る福音書に記載せらるゝ耶穌の言に於て、吾人は此の問題に關する甚だ特殊な見解を見出すのである。既に云つたやうに耶穌は其の生涯の間己が人格に由つて驚くべき精神的感化を現はした。さうして其の生涯の終に近づくに及んでも、聊かも己が感化の減退するを憂ふる色が見えない。否な却つて己が感化の不朽にして益々増し加はるべきことを約束した。彼が人々にバプテスマを授けた靈、さうして彼が世を去ると共に必らず消失すべく思はれた靈は、將來に於て益す多く之を分與すべきことを最も確實に宣言したのである。耶穌は此の靈が從來現存した己が人格であつたことを語り且つ彼は（彼自身と個人的一致を有つ意味に於て）永久に斯の世を去らないことを言明した。是れは生涯の終に於ける耶穌の教訓の調子で又其の最も特異な點である。他の臨終の教訓中に一も之と相似たるものがない。耶穌は之を福音

書に記さるゝ「われは世の未まで常に爾曹と偕に在るなり」と云ふ最後の言に於て概括したのである。此の言をよく熟考せよ。試みに愛慕せられた友人が若くは信任せられた首領が残した最後の遺言であると想像して見よ。悽愴悲惨の情が無限に吾人を感動せしむるものがある。是れは一體何故であらうか。他ではない。かゝる事實は實際全く有り得ない虚妄に過ぎないので、唯纔かに詩的眞理の幾分を残すばかりであるからである。懐かしい記念、仰ぐべき模範、此等は或は残るであらう。されど嗚呼其の人は即ち無いのである。慕はしい容貌、力ある感化は、長へに去つて跡もなく、残るものは最早其の人ではないのである。吾人は其の人が無に歸したとは云はない。又其の靈魂は土塊に等しいとは云はない。されど其の人が一たび存在したやうに存在しないと云ふことは餘り明白に過ぐる事實である。吾人は其の人が存在して居らない爲に、唯益す寂寥を感じ、益す悲哀に陥るばかりである。それで親愛な友人が若くは首領が「わ

れ常に爾曹と偕に在り」との言を残して世を去るやうなことがあつたならば、それは悲惨の極みであると云つた譯である。然るに是れは實に耶穌の最後の言であつた。

新約聖書の他の記事に眼を轉じて見よ。吾人が發見する所は何であるか。恢復することの出来ない個人的損失の悲みであるか、耶穌が世に在つた時に人を誘導し獎勵し薫化した跡を回想する歎息であるか、將た又「彼は最早死せり」と云ふ哀れな繰り言であるか。此等は吾人が新約聖書中に見出すであらうと予想する所で、恰もテニソンの「イムメモリアム」(記念歌)のやうな一種の悲しい調子があるであらうと思つたが、實際は全く之と相反した調子が其の頁毎に躍動するのを見出すのである。さうして耶穌の言が眞實であつた證據は新約聖書の何處にも在るのである。彼の生涯の終に至つて愈よ明白となつた大なる思想は、彼が人々に對する靈的關係、即ち彼が己が人格を以て接する所の關係は、

悉く人々の衷心に活きた靈として永存すると云ふことであつた。さうして余は慎重に云ふ、是れは新約聖書記者が最も意を致した第一義である。耶穌の靈(精神)は彼が世に居つて親しく人々と言を交へた時のやうに眞實に、個人的に今も猶ほ人々を動かす、陶冶し、薫化しつゝあると云ふ事は、疑ひもなく新約聖書文學の大なる特徴である。世界幾多の文學のうち之に似たものは一つもないのである。福音書の記者たちは此の點に於て皆一致して居る。ヨハネに取つては耶穌は凋落しつゝある理想ではない。彼は「彼其の靈をもてわれらに賜へり」と云つた。歴史上最も善く耶穌を知つて居つたペテロは耶穌が「爾曹の中に在り」と云つた其の靈に於て猶ほ内部的な生活に現存するのを認めたと。ヤコブも殆ど同一の語を以て耶穌が「我らの裏に住む」ことを告げて居る。パウロは耶穌を以て世に現存した時と同じやうに惡に勝つことの出来る道徳力と爲し、「活す靈の法は耶穌基督に因りて罪と死の法より我を釋せり」と云つて居る。余は唯四

つの引照をしたに過ぎないが、新約聖書を讀む者は誰も此の種の言の數多くあることを知るのである。余は再言する、新約聖書のうち最も注意すべく最も看過し難いのは、耶穌が曾て世に在つた時と同じやうに、今も猶ほ變ることなく、死んだ記念でなくして活きた靈であると云ふ主張である。彼の最後の遺言は悽愴悲惨な物語ではない。彼は肉體に在つた時と同じやうに、靈として、力として、現存として、人格として、彼等記者と共に、又彼等記者の衷に存在したのである。

是れは果してどう云ふ意義であらうか。是れは實に有力な立證であつて、斯くあるであらうと云ふ耶穌の特別な先見と、斯くあつたと云ふ初代基督敎記者の確信ある主張との契合である。是れは單に偉大にして善良な人格者の感化は世の所謂道德的勢力に附け加へられた有力な遺産であると云ふ意味であらうか。或は新約聖書記者が、靈を以て「彼等の衷に活ける基督」について語るのは、

單に耶穌の思想が猶ほ深く彼等を感化しつゝあると云ふに止まるのであらうか。前者を然りと云ふ者は歴史上最も著しい現象である基督敎會、即ち其の建設者である耶穌の死後直ちに盛な勢を以て勃興した基督敎會を以て、平凡な一事件と考ふるものである。後者を然りと云ふ者は、新約聖書を以て世界に於ける最も誇張的な宗教書、故に又最も劣悪な經典とするものである。何となれば不健全な精神と事實に對する良心を缺如した宗教とより劣悪なものが世にあらうとは思はれないからである。果してさうであるならば、耶穌の靈が猶ほ吾人と共に又吾人の衷に生きて居るとは如何なる意義であらうか。

前章に於て論じた所は、基督の事實が全然無意義のものでないことを示すに足るものがある。吾人は基督の事實が單なる古い歴史の事實でなく、内部の權威、要求、勸説であることを見出した。是れは少なくとも耶穌が吾人の衷に在る靈と生命であることを見出す端緒ではないか。是れは此の事實に抵抗する者と

服従する者と共に齊しく告白する所である。

一體耶穌の要求や權威や感化に抵抗するやうなことがあるのは事實である。若し眞に反省するならば、吾人の多數は特に頑強に抵抗を試みた者であることを見出すのではなからうか。吾人は耶穌の言や模範に對し、屢ば懼然として自ら驚くばかりの高聲にて「否な」と稱へなかつたであらうか。吾人は何故にかく心力を勞するか。何故に千九百年前の教訓と模範とに逆ふ爲めにかゝる決心が要るのであらうか。吾人はアリストートルの倫理學上の所論を聴いてもかゝる抵抗を表さず又心力をも費さず、却つて容易くそれに服従することを拒むことが出来る。されど耶穌が其の言や模範に由つて語る所を聴くに、吾人がそれに服従することを好まない場合には屢ば頑固に、時としては決然として「否な」と稱へなければならぬのである。余は再び問ふ、吾人は何故にかく心力を勞するか。吾人は抵抗に由つて抵抗しつゝある者の實際に存在することを知

つて居るのではないか。是れは陳腐な倫理的教訓でもなく、又因縁のない倫理的模範でもない。もつと活力があり、もつと生氣があるものである。即ち靈であり生命であるのである。是れは昔し富める若き宰やサマリヤの婦に對つたのと、同一の現前を以て、今日の我等に對ひつゝある耶穌である。基督教の此の點を拒むのは、例へばエピクテタスの思想や教訓を拒むのと異つて、其の極單に思想や教訓を拒むのではないことを見出すに至るであらう。之を拒むは吾人に接觸し、吾人の心を動かし、吾人を勸説する一個の靈を拒むのであつて、吾人の「否な」は特異なものである。是れはやがて耶穌が死んだ教訓や模範でなくして活きた靈的人格であることを不承知ながら證明するものではないか。若し彼を拒むことに由つてですら猶ほ耶穌の事實の證明をしなければならぬならば、彼に服従することに由つて益す此の事實の意義を明かにするに至るの言を待たないのである。吾人は漠然たる架空談に陥ることを避けて、明瞭

な實際上から發足しよう。耶穌が自己の靈的現實に就いて語るべき、往々高遠な神秘的の境界に達することがあるけれども、然かも之を卑近な事物に連結しないことではないのである。特に其の言語即ち命令と約束とに之を連結するのである。吾人は眞に此の命令と約束とに接し、之を熟考し、之れを己が生活に適用して其の意義を實現することに努めねばならぬ。されば吾人は遙かに耶穌の一言一語を讀むより以上の事を爲しつゝあることを自覺するであらう。吾人は己が理性と良心と感情と意思とに、見えない勢力、即ち自ら驚くほどに我を啓導し、我を潔め、活氣を興へ、活力を添ふる所の勢力が湧き來るのを見出すであらう。斯の如くして生活した一日は即ち新しい精神即ち耶穌の靈に從つて生活した一日である。かゝる生活は果して吾人が創始したものであらうか。單なる倫理的教訓の結果と思考することが出來やうか。之に關するパウロの説明は最も當を得たものである。彼は『我儕帕子なくして鏡に照すが如く主の榮を見

榮に榮いや増して其の同じ像に化するなり。是れ主即ち靈に由つてなり」と云つた。唯耶穌自身ばかり、唯耶穌の活きた人格ばかりが耶穌の靈(精神)を吾人に與ふることが出来る。靈的文學(即ち聖書)の最も著しい現象は又道德史の事實の上にも其の反響がある。さうして其の説明は唯次の如く云ふの外はないのである。凡て道德宗教界の首領たる人々の人格は、其の人格に存するものと共に、其の生活の終ると同時に永久に消滅しなければならぬのが通則である。されど「此の通則を破る一大例外がある」(ジョン・ケ)耶穌が斯の世に居つたとき彼に親炙した人々の精神に感動を與ふることが出來た所の靈は、今日も猶ほ彼が吾人に分與することの出来るものである。一言にて云へば、彼は「我儕と共に在る」のである。彼の個人的現前はそれに伴ふ感動と共に其の姿を變へて最早肉體に於ては見る事が出來ないのである。されど其の眞實に於て、又其の實體に於て、永久に存在するのである。是れは即ち靈である。テニソンの歌つた

やうに「靈と靈とは相遇ふのである」。耶穌の靈（余は之に對つて「彼」と云はうと思ふ、何となれば靈は眞に人格であるからである）が吾人の靈と交通し、吾人の靈も又耶穌の靈と交通することが出来るならば、到底達しられないと思はれた基督教的品性をば吾人は實際に實現することが出来る。「主は即ち靈なり」。新しい理想的道德の立法者は又其の感動者である。

以上は即ち品性に關する基督の事實の意義である。耶穌は品性の理想であると同時に、又人を感動して此の理想に到達せしむる方である。品性の領域に於て耶穌が有つて居る此の意義については倫理界に肩を比ぶる者がないのである。世の所謂道德家を耶穌に較ぶれば、彼等は唯品性上の問題を弄ぶに過ぎないのである。人の品性に關する問題即ち善人と爲るのは何事であるか又如何にして善人と爲ることが出来るかと云ふ問題について、アリストートルの卓論も、ベニコンの訓言も、ソクラテースの徳行も、釋迦の模範も、之を耶穌が最初は其の

模範と教訓とに由り、次には一層驚くべき彼が永在の人格的靈の現前と力とに由つて、品性實現の靈を分與するに比ぶれば、孰れが果して眞の解釋であらうか。此の點に於て耶穌の名は倫理界の全領域を支配するのである。

果してさうであるならば、是れは實に小は吾人各自に關係し、大は世界に關係する事實ではないか。最も眞實な意味に於て生活の問題は畢竟品性の問題である。吾人が成効と失敗との最も深い原因は、寧ろ第二義である所の世間の毀譽褒貶に在るのではなくして品性に在るのである。不可思議な吾人の生活は唯品性の爲めの生活であるやうである。内部の良心の世界が之を暗示するばかりでなく、外部の境遇の世界も亦之を暗示するのである。何となれば幸運を冀ひ、快樂を求め、世の財産、位地、名譽などを貪るやうな斯かる目的を果さんが爲めには、此の世界は寧ろ不適當であるからである。事物の變化の極りないことや、運命の定かならないこと、健康、財産、幸福を破壊する幾多の豫想し難い

事情は、凡て生活が此等の目的を達する爲めでないことを示して居る。又容易く得て容易く奪はれるやうなものや、縱令之を得ても保つことの困難なものを得やうと思ふのは、明かに生活の主要な目的ではないことを示すものである。畢竟斯の世は斯世的に生活すべきものでないのである。されど試みに此等の状態を観察して見よ、此の變化、此の危険、此の不定は却つて品性の形成を助くるものではないか。此等は靈的に、柔和に、忍耐に、謙遜に、無私に、親愛に人を導き到る所の訓練となることはないか。生活上の境遇はたとひ凡ての目的を破壊することがあつても、唯品性訓練の目的のみは之を廢しないのである。否、此の目的に貢献せずしては止まないものである。是れは余が生活は品性の爲に存するやうであると言ふ譯である。果してさうであるならば、品性の問題を充分に解決する唯一の人格である耶穌が無かつたならば、人生は適當に且つ豊富に生活することが出来ないのである。されば此の範圍に於て、少なく

も基督の事實の最初の意義の限れる範圍に於て、吾人は基督者たることを願はないか。

第四章 基督の事業の更に進歩せる意義

既に論じて来た所に由つて明かになつたのは、基督の事實の意義がまだ其の充分な意義に達しないことである。此の事實は更に進んで攻究すべき問題を提起し来なければならぬのである。若し既に明かになつた所を以て此の事實の最初の意義とするならば、それは唯最初であると云ふに過ぎない。此の意義其れ自身が更に其の意義がなければならぬ。吾人は既に耶穌について他の人格より以上の事を云つた。既に他の人格より以上の事を云ひ得るならば、又更に其より以上の事を云はねばならぬ。吾人は到底現在の位置に止まる事が出来ないのである。耶穌は全く純潔無垢な理想的品性を有ち、其の肉體は十數世紀前に世を去つたけれども、今猶ほ最も個人的感化を及ぼす力があつて、多數の人々には達し難いと思はれた理想をば、或る程度まで實現することを得せし

めたのである。然し其だけであるならばそれは全然結論のない議論に過ぎないものとなるのである。若し倫理的に靈的にそれより以下の事を云ひ得ないならば、更にそれより以上の事を云ふのは智識的責任ではあるまいか。基督の事實の最初の意義の発見は更に進歩した答を要する新疑問を提供するのである。此の新しい疑問は大凡そ次のやうなものであらう。既に論じたやうな歴史と經驗の現象は、人生と自然に關する吾人の哲學に對つても特別な意義があるではないか。是れは果して他の現象と共に同一に思考することが出来るか。吾人は「斯の世の暗黒裡に於て、人類の運命と靈魂の運命とを導きつゝある勢力の性質につき特別な光明を興ふるもの」(千八百九十九年倫敦メイス)として之れを承認することは出来ないか。吾人が信仰の基礎と爲るべきもの、即ち吾人の靈性が屢ば求めて屢ば得なかつた神に關する眞の信仰の基礎と爲るべきものを見出すことは出来ないか。

耶穌の在世以來信仰上の疑問は彼に於て其の解答を見出したと云ふ感覺を避くることが出来ないものがある。是れは争ふことの出来ない事實であつて大なる意義がなければならぬ。耶穌の最初の友は、其の代表者たるペテロが「主よ我儕誰に適かんや、永生の言を有てる者は爾なり」と云つたときにかく感じ、又彼の最も新しい弟子も同じくかく感じた。千八百九十九年の九月「ロバート・エルスミア」の著者は、其の代表して居る學派が、ペテロの立場とは異なるけれども、其の求むる所の光明が得らるゝであらうとの信念を懷いて、「昔ペテロが告白した如く、今も猶ほ告白することを倫敦タイムスに書き遣つた。試みに思ひ見よ、遠き昔のガリラヤの漁夫と英國現代の著者と此の二人の智識的環境と見解との差は如何ほど大なるものであらうか。然るに神に對する其の靈的要求は共に斯くの如く同一の状態を脱することが出来ないのである。且つ思ひ見よ、此の間の幾世紀に於て求めて止まない無数の志道者は斷えず同一の告白を

したのである。是れは信仰上の大問題を解決し得る無比の意義あることを定むる斷案が既に基督の事實のうちに成り立つて居ることを語るものではないか。されば既に見出した基督の事實の意義よりするも、又基督以後の各時代の熱心な人々が之に對した感覺よりするも、此の問題を研究しなければならぬ。大なる理由があるのである。されど之が研究をする際に、基督教の基本を離れて神學上の教義に立ち入ると思ふてはならぬ。吾人が研究しようと思ふ所は猶ほ基督の事實、即ち歴史と經驗との活きた事實であつて、神學の理論ではない。されば品性の問題から信仰の問題に移るに當つて、吾人の研究がゲエテの所謂「理論の枯色」を帶ぶるの必要はない。生命の熱氣と鮮やかな緑色とを保つことが出来るのである。

第一 信仰の基礎

信仰の問題は、神があるかどうか、即ち天地萬有は其の顯現若くは結果であ

る所の第一原理があるかどうかと云ふ論理上の智識的演習ではない。更に是れより以上のものであつて、人性の推理的方面ばかりに由らず、寧ろ其の全體に由つて提起せられた個人的問題である。故に其の求むる所は單に思想の範疇でなく個人の要求を満足せしむるものである。此の問題は解釋の有る無しに拘はらず、人の深い靈性が常に追求し又追求しようとするものである。彼のヘブル詩人が異郷の流寓に於て「我が靈魂は渴ける如くに神を慕ふ、活ける神をぞしたふ」と歌つた言に優つた單純、直截、然かも誠實、悲哀なものは未だ曾てないものである。

現今哲學者の間には殆ど此の詩句のやうな祈禱を輕蔑する傾向がある。靈魂の友であり又父である神を慕ふことを止めて、哲學上に堅く、恐くは又稍悲しく、其の立脚地を定め、靈魂不滅の願望の如きは一種の高尙な利己心に過ぎないものであるから之を放棄せよと忠告する者がある。近代の哲學及び文學の中に

かゝる諷示をしないものは少ない。ゲエテを始め、ヘゲル、ジョルヂ・エリオット若くはマシユウ・アルノルドの如き皆さうである。されど余は是れは全然偽りの放棄、「理當さに放棄してはならないものを放棄して自ら誇る」表面的の勇氣に過ぎないと思ふ。人は決して人格ある神を慕ふの至情と個人的靈魂不滅の希望とを棄つべきものではない。何となれば此に人の眞我があり、其の眞正な尊嚴があるからである。人の眞我は其の人格的個人性であつて、此の個人性は教授オールが云つたやうに「此の我に對して必らず汝を求め、其の以下の何物を以ても決して満足しない」ものである。其の以下のものを以て満足せよと命ずるのは、人を人とするものではない。是れは精神的自殺であつて、どんな哲學的光榮を粧ふても決して名譽とすべきことではない。「斯かる名譽は不名譽の上に立つて居る名譽である」。人の眞の尊嚴は屢ば智識的に告白することを憚るやうな斯かる個人的要求の中に存するのである。斯かる祈禱は或は空しい

ものであるかも知れぬ。屢ば心靈上の父、活きた人格ある父を求めて之を見出し得ないことがあるかも知れぬ。又或は永生の門を敲いて開かれないことがあるかも知れぬ、されど之を求め、之を敲く、人は之に由つて其の小さいことを表はさないで却つて其の大きいことを現はすのである。鄙しい利己心ではない。己が裏に存する無限と、己れ自身又無限であることを表はすものである。有限な天地の一部分であることを以て満足せよと命ずるのは、實に己に献ぐる最も輕少な名譽であると云つてよいのである。

吾人が心靈上の父を求むる深い要求は果して基督の事實に其の應答を見出すことが出来るかどうか。自然や歴史のやうな外界の事實に於ても、若くは道徳のやうな内界の事實に於ても、此の要求が満足せらるることの出来ないのは明かである。余は此の點に就いて簡単に論述しよう。先づ自然に就いて云へば、自然は吾人に告ぐるに唯人の運命と希望とに無頓着な無心無覺の大な勢力があ

ることを以てするばかりである。自然に溫和、優麗の容はあるけれども、之と共に又殘忍、猛惡の姿がある。微細の物にも宏大な思想を含むやうであるかと思へば、又其の最も高貴な作物に對つて、無情にも其の死滅するに一任して顧みないやうな所がある。信仰に對する應答は一つも自然には見出されないで、唯「妖夢」ばかりである。自然はテニソンが所謂「我を生かし又我を死なしむるのみ……其の他を知らず」と云つた、誰かすやうな殘酷な謎を以て吾人の疑問を翻弄するのである。さらば歴史はどうであるか。歴史は物質界よりも人類の活力と智能とを發動せしめたけれども、其の間に吾人の信仰を確め之を獎勵する最高の目的があるかどうか。歴史と云へばげにも失望すべき漠然たる語である。縱令世界に「増進する所の目的」があると云つても、吾人はどうして之を實際的の意義あるものとする事が出来るか。歴史は一大活劇であらう。されど其の作者は誰であるか。登場者は知らない又誰も知らしむる者が無い。

「世界は凡て舞臺のやうである」、さうして其の悲劇的喜劇家である吾人は止むなく自己の小さき役目を務めて辭し去るのである。さて外界の自然と歴史とを經て内界に移ればどうであるか。こゝに、殊に良心の領域に於て、吾人は吾人の神であるべき「活ける神」に就いて多少の徴證を見出すこともあらう。されどそれは唯僅かばかりである。吾人の衷に存する良心の律法は、其の性質著しく命令的、強制的であるから、必らずや宇宙に立法者があつて、其の立法者は道德的人格でなければならぬことを暗示する。されど是れさへ人生の事實と原則即ち吾人が道德と稱ふるものは、吾人に取つて善と満足と力の源であつて之に反するは禍と不安と怯弱の源であると云ふ事以上に吾人を導き得るかを疑はしむるのである。こゝに多少の暗示はあるであらう。されど其の暗示と云ふものも甚だ微弱であつて、確乎たる信仰の基礎とすることが出來ない。斯くて信仰の要求は自然にも歴史にも又良心にも其の満足を見出すことが出來な

いのである。是れは必しも信仰の希望と至情とを否定するものではない。又決して其の虚妄を證するものでもない。唯其の満足を與へないと云ふのである。古今の賢哲は此の點に於て一致した意見を有つて居る。大なる教師たちのうち此の問題について高い地位を占むる者は、古代に於てはプラトーン、中世に於てはダンテ、近世に於てはベエコンに如くものはなからう、(シエキスピニアは此等の問題には容喩しない)。此の三人は共に一致して、自然や人生に由つて信仰の願望を満足せしめようとする理論的企圖が果を結ばないこと、少なくとも其の無力なことを稱道した。ベエコンは「余自身の判断に従ふことは安全でない」と云ひ、ダンテは一度ならずそれは「結果の無い願望である」と云つた。又プラトーンの「フヒドオ」篇のうちで最も人を感動せしむるのは、人智の「筏」に乗つて暗黒と疑惑の海洋を渡る」と云ふ一條であらう。彼は「若し一層安固に導き得る神の言(ロゴス)のやうなものを見出すでないならば、余は思ふ、決し

て危険がないのではない」と云つて居る。

附註——此の節と前節とに於て論じた所の問題は時間の都合上甚だ簡単に過ぐるのを免れない。余が此に論じた所を以て自然や歴史や道徳生活に神がないと云ふものと思ふてはならぬ。余が主張する所は、此等は吾人の靈魂の父、吾人を子として承認し、愛撫する「活ける神」に到らしめないこと云ふのである。自然は道徳的で歴史も又進歩的であるとしても、是れは唯律法に就いて語るに過ぎぬ。且つ律法なるものはバムプトン講演者の一人であるイリングウオルスが云つたやうに「其の働きは普遍的であつて個人的區別をしない。衡平でなく又愛憐がない。決して人格者として吾人を待遇するものでない」(「人的及び」)。ニウマンは其の著「グラムマア・オブ・アツセント」に於て、良心は律法以上の或る者を吾人に暗示すると云つた。されど本文に於て述べたやうに、たとひ律法以上の或る者を暗示しても、是れ

は附隨的の證明であつて、纔かに「正義に向つて進む」生命が律法以上の者であることを告ぐるに過ぎぬ。吾人の個人的靈性は此等の非人格的原則若くは勢力の凡ての宣言の裡に在つて猶ほ靈魂の父を求めて止まないのである。

暗示に富んだプラトリーの語は常に吾人を感動せしむるものがあるばかりでない、頗る吾人を啓發するものがある。「一層安固に導き得る神の言のやうなもの」と云つたのを讀んで、吾人は「言肉體となりて我儕の間に宿れり」と云ふ福音記者の語を聯想しない譯にはゆかぬ。果してさうであるならば基督教の事實と云ふものは他に求めて得られない信仰の要求を満足せしむる神の言のやうな意義を有つて居るのではないか。「主よ我儕誰に行かんや」と云つた使徒たちの懇望の一面は吾人既に之を理會した、されど彼等と共に「永生の言を有てる者は爾なり」と云ふことが出来るかどうか。

吾人は今日或る人々には餘り重きを爲さない使徒たちの證明に由らず、耶穌が神を求むる靈魂の満足は彼自身に由つて得らるゝことを屢ば語つた事實に照らし、益す此の疑問を出す勇氣が出るのである。余は往々註釋學上批評學上の議論を惹き起す「我を見しものは父を見しなり」と云ふ語を引照しない。されど共觀福音書中吾人の目的を充たす言がある。それはバイシユラッハが其の正純なことに由つて確かに「ロギア」の原本中に在つたことが知らるゝと云つたものである。耶穌が萬物は父の賜ふ所であつて「子（耶穌自身である）及び子の顯はす所の者の外に父を識る者なし」と云つたときに、彼は之に由つて三つの事を言明して居る。其の一は、信仰の要求の對象であるものは父即ち活きた愛の神であると云ふこと、其の二は、プラトリーやダンテやベエコンが云つたやうに、人は獨力にて此の神に到ることが出来ないことと云ふこと、其の三は、耶穌は其れに拘はらず此の要求に満足を與へ且つ他の人々は唯彼に由つて此の満足

が得らるゝと云ふことを證明した。かく古來最も偉大なる宗教家である耶穌は直ちに信仰の要求について人類の立場を理會し、其の要求は彼自身に由つて満足せらるゝことを認めためたのである。彼はプラトリーのやうに過ちのない「言」を待ち望むのではなく、既に自ら眞理其のもの、保證をしたのである。吾人はかく語る耶穌に充分耳を傾くべきものがあると思ふ。

信仰の保證について基督の事實に果して如何なる意義があるか。熟思の後に吾人が見出した其の最大要點は耶穌が超自然的であると云ふことである。余は全く先入の見を去り、法律家のやうに、嚴密な文法上の意味にて之を云ふのである。耶穌の人格は吾人が熟知して居るやうな普通の人性を作つて居る勢力として思考することが出来るものではない。又之を拒むことは道理上實際出来難いものである。余は敢て奇跡に關する問題を此に提起しないであらう。是れは耶穌が死より復活したと云ふ歴史的證據が到底答辯し難いから回避するのでは

ない。之を提起しない理由は、元來此の問題が神及び自然に關する豫想條件を
 含むで居るが故に、之が辯論を爲すときは更に幾多の議論を惹き起すからであ
 る。若し耶穌の奇跡を議論の主題とすることが出来るならば、其の品性は更に
 彼が超自然的人格であることを表はすものとする事が出来ないであらうか。
 是れはテニソンが「最大奇跡よりも更に驚くべき奇跡」と云つたものであつて
 耶穌の無罪と云ふ一事が既に之を證明して餘りがあるのである。耶穌が無罪で
 あることは歴史上の事實であつて、想像でないことは既に充分の理由がある。
 さうしてそれが事實であることは、判断を誤り易い教義的偏見を有たない多
 數の人々が許容する所である。教授オールは此等の人々の中に、ヘゲル派の
 人としてはダウブ、マアルハイネツケ、ローゼンクランツ、フハトケ、折衷派
 の人としてはシユライエルマッヘル、バイシユラッハ、ロオテ、リッチル、自
 由派の人々としてはハアゼ、シエンケルを挙げ、リブシユウスの如きは、全然

奇跡に反對するけれども耶穌の無罪を承認する一人として之を擧げて居る。か
 く大家の名を列擧するは、精神に光明を與へないで却つて所謂體を疲らすもの
 であるけれども、此等の大家が齊しく許容する主題がどう云ふものであるかを
 知り得る人には多少の印象を残さなければならぬ。一體罪惡と云ふものは、
 吾人が知て居る如く、人性に善なく存在するもので、罪惡のない處には即ち超
 自然があるのである。さうして其の超自然は禽獸の場合に於けるやうな人以下
 的でないのは勿論である。されど此の無罪も猶ほ論争を免るゝことが出来ない
 ことを忘れてはならぬ。耶穌が超自然的人格であることは、最早既に論じたや
 うに、彼の活きた靈が力となつた人々は、個人的確信や印象として又其の保證
 として承認せらるゝのである。斯かる人は耶穌の要求や批評家の同意を待つ必
 要がなく、己れ自ら其の證人である。耶穌が舊勢力よりも遙かに強い新生活の
 原則若くは力であることを見出すならば、躊躇する所なく誰も直ちに「もし

此の人神より出でずば何事をも爲し得ざる可し」と論ずるであらう。「神より」とは正さに如何なる意味であらうか。吾人はまだ之を説明し得る地位に達しないけれども、少なくとも人間生活の自然的勢力より以上の力が耶穌に現はれて居ると云ふ意味である。是れは實に獨一無比な事實であつて、吾人が此に超自然的と稱するものである。かゝる超自然的事實は、吾人が嘗て解答を求めて苦心した大問題について、遙かに優れた解答を與ふるものである。自然界の答は既に之を聞いた。されど更に傾聴しなければならぬ超自然の事實が此處に在るのである。

以上は吾人が遂に到達した立脚地である。信仰の疑問に答ふる世上各種の事實の聲が甚だ不充分である中に、他の歴史的事實中に全然編入することの出来ない特異な意義を有つて居る此の基督の事實は忽然として現はれた。此の事實は其等の事實以上の事實であつて、事實の事實、超越的事實である。されば其

の意義は、此の事實の終極的結語であつて、以下の事實の意義を以て之を制限したり若くは抹殺したりしてはならぬ。あらゆる事實は之を罪や死のやうな大な事實よりも更に大な基督の事實に比ぶれば、皆小さいものである。故に吾人の靈性は此の事實に對つて信仰問題の最後の解答を得ることを望み、且つ此の事實に存する力は果してどう云ふものであるかを問はうと思ふものである。

附註——余は此處には主に前に記したやうな死後に於ける耶穌の靈的生活について述べた。されど此の事を許容するならば、福音書に記す所の墳墓に勝ちて彼の身體が復活し、事實は當然な事であつて、又強い歴史の根據があるものである。之を信じられない背理として容易く棄却することは出来ないものである。

先づ、此の力は靈的の力であつて、無意無覺の強迫力ではない。無意無覺の強迫力に對してはたとひ止むなく服従するとはあつても、理性を有つて居

る靈として吾人は實際それよりも優れたものである。此の力は靈である。此の力は吾人の靈性に最も高い位置を占むるものである。此の強迫は常に道理に適ひ、之に服従することは全く吾人の自由である。次に、耶穌と共に存する力は倫理的のものである。是れは吾人の心に在つて純潔や眞實や愛となるの力で、此等の諸徳を知ることが出来るのも亦此の力に由るのである。最後に、此の力は個人的のものである。余は今此の語を用ふるに必しも個人的行爲者が在るとは主張しない。勿論此の意義もないではない。何となれば凡ての靈的勢力には實際其の行爲者があるからである。されど此處には寧ろ個人として吾人を待遇すると云ふ意味に於て云はうと思ふ。此の力は團體的に吾人に接しない。否、各個々別々に、殆ど吾人各個の爲にばかり存在するやうである。自然の法則や歴史の過程には、其の普遍的意義をば會得するけれども、未だ吾人各個に對する意義を見出すことが出来ぬ。されど基督の事實に於ては、全然之に反して、普

遍的言語を以て之を言明することは寧ろ甚は困難である。然かも吾人各個の心に對つて如何なる意義があるかは吾人が既に確知して居る所である。斯く基督の事實に存する力が靈的、倫理的、個人的に吾人と關係を結ぶものであるならば、それは實際吾人が求めて居る神を指すものではないか。最も簡單に最も實際的に「活ける神」を見出したものではないか。吾人の靈が要求して居る「活ける神」は、斯かる力に外ならないのである。此に至つて、吾人は神は即ち自然と云ふ大機關の一部分ではなく、否、自然の秩序の維持者であつて心靈上の父を求むる吾人が靈であるが如くに靈であることを知る。又吾人は善でない者を神と稱ふるとは出来ないから、神は倫理的に神聖でなければならぬ。神は又個人として吾人を待遇し、決して自然が其の悠久な過程の一項として吾人を處理すると同じやうであつてはならぬ。されば耶穌に存する力は、少なくとも吾人の心靈の友であり父である「活ける神」が在すと云ふ信仰を起さす

る端緒である。神に對する吾人の要求は基督の事實の一層安固なる言に於て安心の地を見出すのである。

斯の如く基督の事實は活ける神を信する信仰の基礎である。此の基礎は耶穌の教へた教訓即ち教理ではなく、耶穌自身であることを注意しなければならぬ。かゝる區別は甚だ必要である。信仰は教師中の最高者である者の思想に基かずして、其れ自身神の言であることを表明する事實に基くのである。耶穌が語つて、さうして其の言が福音書に記されたと云ふのではない。此の事實は神が語つてさうして神の言が歴史と經驗の中に在ると云ふのである。此の區別が必要であるのは、即ち信仰は新しい思想でなくして新しい事實を要すると云ふ點である。思想としては、父なる神に對する信頼や墳墓を越えた希望のやうな基督敎信條の中心點も未だ全く新しいとは云はれない。多くの熱心にして高尚な人々は夙に此等の思想を捉へて居る。さらば何の缺くる所があつて一步を進

めて信仰とはならなかつたかと云ふと、歸する所、其等は唯思想と推論と翹望に過ぎなかつたからである。此等の思想は吾人の實際に符合する確實な尺度ではない。人生の頑固な事實殊に死といふ最後の事實の前には、かゝる思想も躊躇逡巡して脆くも其の力を失ふではないか。ウォルツウォルスの「逍遙遊」の詩句に

限なき希望は人の有てる所、
之れを高く支へんとせば
程よき平均を保たざる可らず。
莊嚴なる勢もて地より
煙の柱の如くに立ち上ぼる。
されど空氣薄き處に到れば
消え失せて見るべくもなし。

と云つて居る。死の呼吸の空氣薄き處にては、誰か翹望と推論とが眞に約束の地に吾人を導く雲の柱であつて、幻想の焰から出づる煙の柱でないことを確證することが出来るか。かゝる信仰は或る性質の人に由つて養はるゝとはあらうけれども、事實の地盤の上に確立しない概念の築造であるからして、決して多數の心を捉ふることは出来ないのである。されど基督教的信仰は確かな基礎を有つて居る。其の基礎は耶穌の思想でなくして事實である。是れは單に新しい教理ではない、實に新しい基本を供ふるものである。是れは父の如き神が在すと云ふ理論から來ずして、歴史上經驗上の一大現象から來るのである。斯の如きは實に信仰が明かに要求する所である。信仰は地に觸るゝ毎に屈撓し難い力を回復する彼の希臘神話の、アンテユウスのやうなものである。信仰の觸るゝ地は事實即ち基督の事實である。

斯く信仰の基礎を基督の事實の上に置いて、然る後、既に吾人が研究したや

うに此の事實が二つの方面を有て居る事實、即ち外部的歴史の事實で同時に又内部的經驗の事實であることを思ひ起すのが適當であらう。吾人の信仰の基く所は此の二方面の事實であつて、言を換へて云へば、信仰は歴史上並びに經驗上の證明を有つて居るのである。現代の思想界に於て、後者は之を承認するも前者は之を無視しようとする有力な傾向がある。故チー・エツチ・グリーン若くはマルチノ博士の如きは信仰は唯内部の宗教的意識にばかり權威があつて、外部の歴史の啓示に依頼するものではないと云ふ意見である。外部の權威を以て信仰を論證することが出来ないのは固より眞理である。信仰が神に屬することとは、唯内部的にばかり證明することが出来る。されど是れは必らずしも内部的經驗ばかりを重んじて外部の啓示を無視することが出来ることではない。實際内部的經驗は外部の啓示を離れて其の正確なことを維持することは出来ない。それは未だ眞に確定された證明でないからである。基督教の主張する所

は神は相互に證明する二つの方法を以て、即ち歴史的基督の證明が内部的經驗の證明と一致し、且つ之を保證して（グリーン）の思つたやうに之を置き換ふるではない、之を人に語り給ふと云ふことである。是れは實に耶穌自身の方法である。カノン・ゴアが云つたやうに、彼は「二重の基礎の上に宗教的信仰を置くことを企てた」のである。此の歴史的證明は固より吾人の信仰を創始するものではない。それは出来ないことである。されど吾人が誤つた信仰に陥らなことを證明するものは實に歴史的證明である。基督に關する外部と内部との證明が互に相一致し、歴史上のものは心靈上のものを批准し、心靈上のものは歴史上のものに調印し、かくて吾人の信仰は始めて完全な基督の事實、即ち「活ける神」を意味するものとしてより外に説明の出来ない歴史並びに經驗の事實の上に確立するのである。

吾人は今信仰の種々な内容に就いて辯論するの必要がないと思ふ。何となれ

ば、若し耶穌が人に對する神の言であるならば此の一事既に萬事を包含するからである。若し神が語り給ふならば吾人を満足せしむる程度に於て語り給ふのであらう。必ずしも凡ての事を示し給ふのではなからう。唯吾人が知らなければならぬ一事、即ち神の性質如何を示し給ふのであらう。神は耶穌を遣はした神である。第一義として之を許したならば信仰は自ら其の爲すべきこと爲すであらう。例へば靈魂不滅に就いて基督教の信仰は一死萬事を了はらないと云ふ論證を有たないのである。されど既に神の性質を確めることが出来れば、墳墓の鍵を握つて居るものは誰であるかを知り、且つ靜な希望を以て能く己が愛する者を神に托することが出来る。之を彼のスピリチュアリズム（降神術）が此の錠を開かうと試みるに比ぶれば、遙かに優れたものがあるのは言を待たないのである。神の性質は信仰に關する凡ての疑問中の疑問である。此の疑問にして解答を得るならば、信仰はこゝに始めて萬事について其の安心の基礎を得る

のである。

さらば、此處に止まつて、既に不充分ながらも稍遺漏の點なく、基督の事實の意義を論述し得たと云ふことが出来ようか。否な、否な、かゝる事は到底出来ないと、吾人は更に前進しなければならぬ疑問を提起したのである。吾人は既に耶穌が到底斯の世の現象界内に於て説明し若くは評價し得られない人格であることを見出した。吾人は特別な意義に於て彼が「神より來」つたことを述べた。彼は吾人が知つて居るやうな人々より以上の者である。此等は猶ほ凡て明瞭にしなければならぬ。早晚其の如何なる意義であるかを言明しなければならぬ。吾人は既に是れまで云つて來た所に加へて、愈よ深遠な此の基督の事實が果して何であるかを問はなければならぬのは甚だ明白である。

第二「言は即ち神なり」

今や吾人の面前に提出せられた問題は、谷間からマテルホルンの高峯を望む

やうに、吾人をして轉た眩暈を感じせしむるものがある。然り、かく吾人をして眩暈を感じせしむるものがあるけれども、一瞥して能く其の頂きを見ることが出来る。問題は元來次の如くである。若し耶穌が人間以上であるならば、即ち彼の意識や無罪や、死なない個人的存在と勢力や、壯大な事業や、意義に於て人間以上であるならば、吾人は彼について何と云はなければならぬか。答へは唯一つである。さうして其の答は全然信じ難いものではない。否な論理上に於ても宗教上に於ても、齊しく避くることの出来ないものである。

此の議論の合理的或は論理的方面は極めて簡単に述べることが出来る。若し耶穌が吾人が知つて居るやうな人々より以上の者であるならば、吾人は彼を指して一種の怪物、人間以上の半ば神に似た一種の怪物と云ふことが出来るか。否な、かく云ふことは歴史上經驗上の基本に合はず且つ同時に幾多の反對論を惹き起して底止する所がないであらう。吾人は耶穌に於て能く人の特質と神の

特質（人の罪を赦し、或は新しい道徳的自我を創始するの力があることは即ち神の特質ではないか）を見出すことが出来るけれども、然かも人でもなく神でもない特質は一つも見出すことが出来ないものである。斯かる存在者を吾人の思想中に許容することの不可能なことは論を待たない。半神半人の教は畢竟異教主義に立ち戻るものであつて、斯かるアリアン説若くは准アリアン説は、歴史的にも經驗的にも一つも己を辯護すべきものを有つて居らぬ。却つて哲學的に幾多の反對論があるのである。斯かる基督は福音書を讀むもの、承認することの出来ないものであつて、チー・エツチ・グリーン（曩には反對の立場から博士の姓名を擧げたけれども、此處には好意と感謝とを以て之を擧げる）が所謂『古代宗教の鬼神説から脱化し來つたもので、哲學者の瞬間も同意することの出来ない』ものである。是れは宜しく公平に遺漏なく研究しなければならぬものである。例へばカイムが耶穌を以て「超人的の奇跡」と爲し、チャンニン

グが「耶穌基督は人間以上であると信する」と云ひながら、纒かに之れに止まつて其の説明をしないやうなことは、正統的信仰の立場から不満足を唱ふるまでもなく、純然たる知識上の立場からも不満足を表はさなければならぬ。此等の説は果して嚴正な議論であるか。若し嚴正な意義を含まなければ、それは基督の大問題に就いて智識上何等の價値もない一種の廻避ではないか。若し嚴正な意義を含むならば、それは歴史上些しの根據もないもので、哲學も又之を棄却しやうとする立場であると云はねばならぬ。

果してさうであるならば、此處には唯一つの途を餘すばかりである。基督教思想の初代に於て、天啓に接した炯眼の一記者が、議論や説明を用ひずして「言は即ち神なり」と書き記したときに、正しく此の一つの途を取つたのであつた。使徒ヨハネの徹底した批評眼をば世は殆ど認めないのである。されど彼は一躍幾世紀の論争を超越し、一瞥して、凡ての歴史が解釋を試みた所、即ち

アリアン説の如き中間的憶説は到底歴史的にも論理的にも維持することが出来ず、其の結果、單に人性を認むるか或は神性を認むるか、二者其の一を出でないことを看破したのである。かゝる結論に基いて、ヨハネは管に耶蘇に關する最高最善の記述をしたばかりでなく、己が記述することが出来る唯一の記述をしたのである。基督者としては、彼は基督をば單なる人とするものが出来なかつた。吾人も又さうである。思想家としては、彼は基督をば中間的神性と思ふことが出来なかつた。吾人も又さうである。若し彼にして到底記述しなければならぬならば、彼は唯一事を記述することが出来たのである。吾人も又基督の誰であるかを言明しなければならぬならば、實に唯一事を言明することが出来る。余は再び云ふ、吾人は全く止むを得ない所から全く信じられない結論より救ひ出ださるゝのである。

余は甚だ簡単に、故に又甚だ不充分に此の論理的研究をしたけれども、最早

是れ以上を論ずるをしまし。何となれば、是れは信仰を唯益す難境に導くばかりで、靈的眞理は到底斯くしては其の正確な點に達することが出来ないからである。耶蘇の神性は吾人が到達した論理的結論であるばかりでなく、又實に基督教的經驗の經緯に織り成されたものである。基督者は基督者として深く之に包擁せられ、又深く之に歸依するものである。

耶蘇の神性は決して基督教の餘論ではない、實に基督教其ものの全體である。吾人が是れ迄論じて來た基督の事實の意義は、畢竟これに外ならないのである。基督者が耶蘇から受けたものは、單に神に關する教訓ではなく、神から出でた生命と力とである。彼等は神に於て見出さうと願つたものを、悉く基督の事實に於て見出した。彼等は又「爾(神)と爾の遣はし給へる耶蘇基督を識る」と云ふ永生の定義を讀むに當つて、神と基督との區別を宗教的に維持することが出来ないのである。彼等は神は基督の外に無く基督の中に在ることを見出し

た。吾人は耶穌の人的生命と人格に接して、更に高き力の源に導く所の人的生命と人格を知るばかりではなく、自ら神自身にも劣らないことを宣言する者の現前と力を知るのである。耶穌が吾人に接し、吾人の衷心に動作するとき、彼は神の爲し給ふ事を爲すのである。若し之れがないならば、凡ての基督教的經驗は空しいものである。果して云ふ所の如くであるならば、吾人が耶穌の誰であるかを言明し得る途は唯一つである。ヘルマンが其の著「神と基督者との交通」に於て「吾人が彼の神であることを告白するは正當な名を彼に献げたのである」と云つたのは實に適當である。實際神に外ならない者に對して吾人は如何なる他の名を與ふことが出来るか。是れは基督の神性に關する眞の基督教的意義である。信條の教義的定義は之に比ぶれば全く第二義に屬するものである。耶穌が實際諸君に取つて神であるでないならば、たとひ其の神性の教義を主張しても、それは全く事實ではないのである。耶穌が實際神に外ならない

者でないならば、正統的信條も遂に根柢のない空文である。されど耶穌が果して云ふ所の如くであるならば、諸君は彼に「正當な名」を献ぐるの外、他に途はないであらう。且つたとひアタナシヤン信條や其の他の告白（此等に對つて正當な判定を下さうと思ふならば其の歴史的事情を適當に記憶するの必要がある）に對して多少の障礙を感ずることがあつても、必らずや諸君は言語に於ても彼の彼である事實上の名を以て耶穌を呼ばなければならぬであらう。且つ深い正直な基督敎生活は凡て之を基礎として實行せらるゝ。耶穌を以て朋友、教師若くは嚮導者とするばかりでなく、最も正確な内部的の意義に於て我が主とするならば、吾人の基督敎生活は決して滯滞することがないであらう。耶穌が主であることは個人的生活の最上權である。吾人の情緒や意志は皆之を彼に献げて彼の有となし、道徳上結極の上告所である彼の權威の前に吾人の良心だも其の權威を譲らなければならぬ。實際生活に於ては、まだかゝ

完全な服従は容易く實現せられないけれども、觀念に於ては、到底基督教から分離することの出来ないものである。斯の如き關係は、唯一者に對するの外誰にも許し難いものであつて、若し之を人に許すときは、智識上にも道徳上にも、自尊の精神と人たるの體面をば全く放擲するものである。さればかゝる關係は唯神に對する時にばかり正當である。若しかゝる關係が果して基督教生活の眞の成立である耶穌に對するものならば、彼の神性を告白することは、唯基督教生活の實際に「正當な名」を附けたのに過ぎないのである。以上論じ來つた所を最も簡單に云へば、吾人は耶穌に對して字義通りに腹藏なく「我が主」と稱ふるでないならば、眞の基督者たることが出来ないものである。吾人は他の如何なる受造物に對しても、かく云ふことが出来ないであらう。吾人は若し耶穌に對つて「我が主」と云ふことが出来るならば、又彼の誠實な使徒と共に「我が神」と云ひ加ふることが出来ないであらうか。若し基督者にして主の神性を

維持することを好まない者があるならば、敬重すべき己が人格すら遂に維持するに困難であることを見出すであらう。

耶穌が神であると云ふことは一見容易く信じられない結論であるけれども、遂に之に到達することを避け得られないものである。理性は耶穌を半神として承認することが出来る。宗教は彼を中間的現象として考ふことが出来る。故に、耶穌が人間以上であることを既に云ひ得る吾人は、更に進んで「言は即ち神なり」と云はなければならぬであらう。

附註——勿論余は「耶穌は神である」と云ふ事を以て、リツチル派の如く基督は宗教上吾人に取つて神たるの價値があるからして神と思考することが出来るものではない。歴史的、論理的推論は宗教的推論と相合し、さうして後者の判定をば一つの事實として確定するのである。斯かる思想は少しく之を思考すれば實に吾人を壓伏するやうな大思想である

ことがわかる。されど之を信ずると云ふことは果して何事であらうか。是れは頗る困難な事である。たとひ歴史的事實の論理的結論と基督教生活と經驗に於ける其の力を許す者でも、かゝる智識は猶ほ高遠にして之に達することの容易くないことを感ずるのである。吾人は之に關して提出せらるゝ二三の難問に對つて大膽に抵抗するの覺悟がなければならぬ。例へば、吾人は最早コペルニカス以前に生活するものではないと云ふ議論の如き屢ば吾人にその記憶を催促することがある。地球は是れまで宇宙の中心で、其の住民は造物者の瞳子のやうに其の保護を受けたと信せられたけれども、今日は最早無數の世界から成り立つ宏大無際の際の組織の一斑點に過ぎない。故に無限なる大原因が、自己の宇宙が無際の際の空間を占むるに拘はらず、却つて極小な地球の住民の狀貌を取つて其の間に宿つたと想像するやうなことは、正氣の沙汰ではなからうと、冷評的質問を受くることがある。されど是れは唯想像を驚殺しようとするに過ぎないのであ

つて敢て怪むに足らぬ。吾人は此の宇宙以外の宇宙について少しも知る所がない。此の地球の外他に理性と道理とを有つて居る生命が存在せぬなら、それでよい。若し存在しても、此の世界は物質的に微細であるに拘はらず、猶ほ創造の最頂點であることを失はない。縦合さうでないでも、人類は人類であつて神を知つて之を愛し之を尊ぶの能力を有つて居る靈的存在者である。人類が果して斯かる人類であるならば、如何に無數の世界があつても關係はないではないか。たとひ他の世界に人類に似た存在者があつても其の人類であることはどうして吾人と異つたものがあらうか。今や此の小さい世界に於て最も切迫した靈的利害の大問題がある。されば物質と靈との眞の輕重を知り給ふ神には、此の世界は決して小さい世界ではないのである。テルタリアンは嘗つて自ら問ふて「さらば神子成肉は果して神に過當なものであらうか」と云ひ、さうして自ら之に答へて「是れは神に最も適當なものであつて、吾人の救拯ほど神に取つ

て「貴いものはない」と云つた。スペンサーは「時間空間の制限をも加ふることが出来ず、又全宇宙すら其の比較的極小の創造に過ぎない彼の大原因が、人の状態を取つたと云ふことは果して信じ得らるゝであらうか」と云ふ疑問を提出して、是れで以て由々しい神の概念を吾人に與たやうに思つたかも知れないが、然かも神を以て、恰も所有物の多大な爲に物質化した世の所謂富豪のやうに、たとひ宇宙の一小部分にもせよ、其の測られない靈的利害の價値をば忘るゝまでに至つたと考ふるほど、由々しい誤つた概念はないのである。

此等の反對論を斥けることは出来るけれども、神子成肉を信する眞の困難はまだ他に在るのである。如何に有力な議論も唯纒かに神子成肉を事實として吾人の心に建設することが出来るばかりである。されど「余は之を拒むことが出来ない」若くは「余は之を承認する」と云ふばかりでなく、更に進んで、「余は之を信する」と云はしむるものが唯一つある。それは即ち神子成肉の必要を悟

ることである。余は讀者諸君が或る點まで此の事實の必然の理を認むるでないならば、神子成肉の事實を事實として實際に了解するやうになることが出来な

いと思ふ。此事實が神から出た必然的眞理として吾人に訴へ來るとき、始めて吾人に對つて直接に眞理となることが出来るであらう。かく吾人は基督の事實の此の驚くべき意義を承認しなければならぬ。更に進んで此の意義の意義を問はなければならぬ。然り吾人は何故に神が人と爲り給うたかを問はな

い譯にはゆかないのである。

此の疑問の答は即ち基督の事實の最後の意義であつて、次章に於て論述しやうと思ふ所である。されば余は次章の緒論として、又此の章の結論として、吾人が是れまで研究した信仰の要求に對する基督の意義、即ち神の性質の啓示である基督の意義のうち、神子成肉の思想が果してどう云ふ位置を占むるか云ふことに就いて此に一言するの必要があるを信する。さうして神の性質殊に神

が愛であると云ふことに就いて其の最高の言を信仰に提供するものは、唯神子成肉ばかりである。

抑も愛とは何であるか。愛は親切若くは好意と云ふやうなものでなく、更に眞純な性質を有つて居る。愛は即ち犠牲であつて、一點の私が無く、自己と自己の所有とを與ふるものである。神が愛であると云へば、神は自ら犠牲となり私無く、自己の所有ばかりか己れ自身をすら惜まない、寛大な性質があることを云ふのである。然るに神の言、音信者、啓示者である者が神と一體であるでないならば、たとひ世界に對する神の恩顧と注意とは或は之を表はすことが出来るであらうけれども、深い意味に於ける眞の愛の表現はないのである。恩顧と注意とはまだ神に於て自己を與ふることを實際に表はしたものでない。愛とは元來自己を與ふることである。余は此の場合に神が愛でないとは勿論主張しないけれども、然かも其の愛はまた眞實に愛として表現實行されたものでは

ないと思ふ。されど耶穌が果して成肉の言であるならば、「是に於て神の愛われらに顯はれたり」と云ふことが出来る。こゝに神は自己を與へつゝ在し給ふのである。他を遣はし給ふのではなく、自身を犠牲と爲し給ひつゝあるのである。神は唯善にして恵み深く、吾人を認識し、吾人を祐助するばかりではない。最も眞實な意味に於て吾人を愛し給ふのである。「神世を愛せり」とは如何にも偉大な語である。或る人は「また神は天地を創造せり」若くは「神は世界を審判すべし」と云ふ意味を理會しない人々が「神は愛なり」と云ふ語を理會したものが如何にも多い」と云つた。愛は今や基督教の常套語となつた。されど神子成肉を除くならば、眞に基督教をして神は愛であると云はしむるものはないのである。何となれば神子成肉の外に全能の神が自己を與ふることと其の無私、全愛とを表現するものがあらうとは思はれないからである。

第五章 基督の事實の最後の意義

基督の事實に於て吾人が既に見出した意義の意義を問はうと思ふならば、今一たび此の事實の何であるかを明かにする必要がある。抑も基督に於て吾人が見出した意義は、彼が神の生命と力との成肉であること云ふことであつた。さうして其の理由とし根據とする所を了解するでなければ、實際成肉の意義を會得することが困難であると云ふことであるならば、此の成肉が歴史上如何なるものであるかと云ふことを記憶するのが肝要である。今再び基督の事實を研究しやう。

されど何故にそれが肝要であるかと云へば、それは此に歴史的でない思考法があつて、哲學的に研究して其の解釋でない解釋を提供しやうとするからである。吾人は屢ば次のやうな議論を聞くのである。即ち、成肉の思想は神の性質及

び神と人との關係の中に包含せられて居る。神が果して靈であつて又愛であるならば、其の啓示を受くるに堪ふるやうに創造した存在者即ち人類に對つて常に己を現はさんことを求めなければならぬ。是れが神をして遂に人の貌を取るに至らしめたものである。斯くの如く成肉は神の生活の一部分であつて、其の理由と根據とは實に此に見出すことが出来るのである。かゝる思想の傾向は殊にヘゲルの特有であつて、又抽象的論理的術語で以て基督教を解釋しやうとする凡ての哲學者の特有である。神學上に於ける同様の傾向は、博士ウエスコットの所謂「創造の福音」詳く云へば「人類の創造に包含せられた成肉の約束」と云ふ思想と共に、許多の神學者が推奨したものである。人の注意を惹くやうな論理上の艶麗がないではないが、歴史に立ち返へつて之を見るときは、其の艶麗も忽ちに凋まざるを得ないのである。何となれば、哲學は唯宇宙の事實を論ずる時ばかり有益であるが、今此に問題となつて居るやうな歴史上の事實を

厳密に研究するに堪ふるものではないからである。神の自啓が基督に於て其の
 最頂點に達して居ると云ふことは之を承認することが出来る。されど今一度基
 督とは誰であるかを問はねばならぬ。請ふ「此の人を見よ」。神が基督の事實に
 由つて世に來り給うたのは、單に人類の中にも來り給うたのではない、實に悲哀
 と屈辱と苦痛との裡に、涙と祈禱と熱い汗の滴りの裡に來り給うたのである。
 又單に人世勞苦の裡に入り給うたのではない、實に言ひ難く測り難い苦難の裡
 に投じ給うたのである。吾人が今此に思ひ廻らさうと思ふ所の神の自啓、神の
 成肉は即ち其れである。管にベツレヘムばかりでなく、ナザレばかりでなく、
 ゲツセマネとカルバリエとは吾人が思考しやうと思ふものである。是れは成肉
 の哲學的思想ではない、實に成肉の歴史的事實である。若し人と爲れる神の自
 啓は愛と靈である神の觀念中に包含して居ると云ふならば、其れはまだ一つも
 言ふべき事を云はないものである。是れが果して「悲みの人」に見るやうな自

啓が神自身の生活に包含せられて居るとの意味であらうか。吾人は更に之を研
 究するの必要がある。唯吾人の哲學は斯かる事實を説明する理論であると云ふ
 點に於て肝要である。基督教を論ずる尊敬すべき著者の一人ジョン・ケヤアド
 は「神と云ふ觀念其のものには基督の人格に顯はれて居る人類との關係をも包
 含するものがあるやうである」と云つて居る。此の關係は果して如何なるもの
 であらうか。單に人と爲り給うたとの意味であらうか。さう云ふ意味であるなら
 實際の事實を叙するに餘り淺薄ではないか。所謂人と爲り給うたとは實に「悲
 みの人」、「荆棘の冠を戴いた人」と爲り給うたのである。余は今此の人を見
 るのである。余は晩餐の席上に此の人の無限の悲哀を見、ゲツセマネの園に此
 の人の大なる苦悶と熱い汗とを見るのである。余は「父よ若しかなはし」と云
 ふ此の人の聲を聞き、「我が神我が神」と云ふ此の人の叫びを耳にするのであ
 る。余は將に「神と云ふ觀念其のもの」には果して斯の如き人類との關係をも

包含するのであるかを問はうと思ふのである。然り、成肉の思想に關して如何なる哲學的考察が行はるゝとも、吾人は此等が成肉の事實を説明し盡すことを主張しまい。されば唯歴史に對するがよい。此に猶ほ多くの云はねばならないものがある。如何にも慕ふべく又美はしい、されど終には眞に畏るべく又測り知り難い、此の成肉の理由と根據とは、猶ほ之を探求しなければならぬのである。

更に多くの云ふべきものがあることを見出し得ると否などに拘はらず、吾人が猶ほ探求しなければならぬ方向は、耶穌が明かに示して居る。耶穌は暗黒な彼の生涯が愈よ危機に迫まつたとき（余は晚餐の設立に關する聖書の記事が信據すべきものであることに就ては左程の異論があらうとは思はぬ）、彼の血が「罪の赦の一爲に濺がるゝものであることを語つた。此の言は成肉の意義を開くに足る鍵であつて、之を探り用ふることを拒むのは、唯回避心から出たもの

と思ふの外はない。成肉の意義は實に罪惡の事實の中に見出さなければならぬ。耶穌自ら之を云つた。此の一事が既に充分である。

吾人が進んで研究しようとする問題は一體どういふ問題であらうか。其の解答に光明を得んが爲には、吾人は凡べての問題中最も暗黒な最も困難な又最も失望すべき問題に移らなければならぬ。且つ吾人が今進み入らんとする主題は我等が全心を擧げて之に面することを厭ふものであつて、往々其の事實を疑ひ、其の意義を弱め、殊に我等自身に對して之を適用することを拒むものである。故に吾人は此に再言する、耶穌を理會しやうと思ふ人々に對ひ此の方向を取つて進むべきことを命ずる者は實に耶穌である。臆面なく罪惡の事實を研究することを願はないならば、基督の事實を遺憾なく論ずることが出来ないことをも又耶穌に由つて之を承認すべきである。

第一 罪惡の實在

一體罪惡の研究をば嚴密に且つ有効に爲し遂げやうとすれば、やがてそれは我等自身の研究に外ならないのである。若し夫れ人類一般に罪惡があるとして實際上の事實や基督教外の大家の證明を擧げて之を論ずることは甚だ容易い事である。「罪は凡べての人に普通である」と希臘の悲劇家ソフォクリーズは云つた。羅馬の道徳家セネカも「我等は皆罪を犯して居る」と云つた。近代の文學殊に小説には同一の告白が多いばかりでなく、忌憚なく人生の現實を寫すことは厭ふべき不道徳であるとの非難に對する辯護が澤山である。されど斯の如き有罪の一般的彈効は良心に何等の印象をも刻み付けることが出来ないのである。恰も論理書が「人は皆死ぬべきものである」と主張するけれども、凡ての人は唯大前提として之を承認するばかりで、未だ曾て少しも死ぬることを實際に承認しないと同じことである。罪惡は死と同じやうに個人的事實と爲るでないならば、嚴肅に之を實現することが出来ないのである。吾人は唯直接に己が身の上

に起り來つたことを悟るに至つて、始めて實際に之を知り得るのである。果してさうであるならば、「罪惡」と云ふ語は、其の人自ら罪人であることを感ずるときの外は、決して嚴肅な又適切な意義を有たないのである。若し罪惡に對する一般的彈効が充分に有罪の感を個人に與ふることが出来なければ、誰が之を與ふるのであらうか。それは耶穌基督である。人は己れが邪惡に耽溺して、不幸と慘苦とに陥つた際には、屢ば惡と云ふものが嚴然として存することを實際に承認し、己れの愚鈍であつたことを歎息することがないではない。然かし之れすらまだ充分に罪惡の感覺を喚起する力があると云ふ譯にはゆかぬ。又人の良心に對つて譴責する者が無いではないが、それも往々其の力を失ひ、其の知覺を鈍らし、遂には良心も死失せて、毫も其の譴責を全うすることが出来ないやうになるのが多いのである。人生生活の正邪善惡に對して心靈を鋭くし、良心の聲を蘇生せしむるものは、獨り耶穌基督ばかりである。人

々をして罪を悟らしむるものは彼れ自身の靈であることを云つた者は、實に耶穌であつた。吾人は今罪惡の何であるかを研究するに當り、光明があり恩寵がある基督の事實から遠かりつゝあると思ふてはならぬ。否、我等が罪を犯して居ることを告白しなければならぬ。實に此の事實に對するからである。

人若し基督の事實に由つて適切に、公明に、自己の生活を照し見るならば、少なくとも左の三つの事に氣が附くであらう。

(第一) 人は自ら其の善なるものを認むるけれども、却つて其の惡なるものを選んで行ふと云ふことである。此の譴責は吾人自身直接に之を受けない譯にはゆかぬ。吾人は能く之を知つて居る。吾人に基督の事實ばかりでなく、人性及び生活の事實は幾たびか此の結論を吾人の面前に提供して居る。吾人は獸類であるかのやうに決して善生活を辨知しないと云ふことは出来ぬ。されど何故か

思想や言語や行動に於て、惡を擇んで之を遂行するのである。吾人は能く之を認知して居る。概括的でなく、具體的に、特殊的に、又偶然の例外でなく、吾人の生活の特徴として、之を認知して居る。吾人は昨年の事若くは前週前日の事を回想して、悪い習癖や不親切な言語や利己の行動や鄙吝の念などを能く數へ擧げることが出来る。吾人は常に附き纏ふ罪惡即ち一種の罪狀を携へて居る。さうして幾たび之に打ち負けたか、それを數ふことが出来る。且つ其の數が吾人の頭の髪よりも多いことを知つて居る。吾人の過去は此の罪の爲に費され、吾人の品性は此の罪の隨伴者、吾人の性質は此の罪の住家であるかのやうに思はるのである。余は殊更に惡人を指して云ふのではない、又必ずしも甚しい敗徳を擧げて語るのでもない。未だ自己の生活の事實につき耶穌基督に接して良心を動かしたことの無い普通一般の人が、吾人が今基督の事實に於て見出した所のものに對し、虛心坦懐、過去に於ける歲月を點檢したならばどうであら

う。彼は果して最も力ある根深い自己の傾向や、思想行為の日々の習慣や、幾千たびも繰り返した性癖は、皆高尚な愛から出でず、又最高の撰擇を爲さず、却つて俗世の「眼の慾」、「肉の慾」、又恐らく最も普通な、さうして日々平然として陥つて居つた、けれども今は自身に之を認めて告白することをすら愧づる所の、卑しい「勢より起る驕傲」から出て居つたことを見出すことはないであらうか。

此の事は又耶穌の靈が罪に就いて悟らする(第二の點に進ましむるものである。さうして此の點は甚だ個人的で、特に直接に第一人稱を以て語る方がよいのである。耶穌は余をして少なくとも次の事が決して云ひ通がれ得られるものではないことを感じさせる。即ち余は單に凡ての人と同じやうに罪があると云ふに止まらないで、幾多の特殊な事柄について罪を犯して居ることを感じさせるのである。余は他人については同様に云ふことが出来ぬ。余は他人には幾多の怨す

べきものがあることを感ずる。故にパリサイ主義の驕慢に陥ることなしには何處までも彼等を宣告することは出来ぬ。されど余自身に對して審判を下すときは、一もかゝる驕慢はないのである。固より外部の境遇や内部の性質から来る誘惑はあるけれども、此等の爲に余は罪を犯した者であるとの譴責を免るゝことは出来ないのである。其の理由は二つある。其の一は、たとひ如何なる境遇や性質が余をして罪を犯すに至らしめたのであつても、余は實際惡を爲し、又實に之を爲すことを好んだのである。此の好むと云ふ事が、屢は願ふて居る境遇を自ら作り出だし、又屢は都合好き誘惑を招いたのである。是れは己が心に對して余が能く知つて居る事實であつて、他人の心に關しては決して之と同じやうに知ることが出来ないのである。かく余は他人を宣告することの出来ない所以のものを以て余自身を宣告するのである。其の二は、余は他人に關して少しも知らないけれども、余自身に關しては知つて居る今一つの事がある。即ち余は

更により善き撰擇を爲し、更により善き方法を取ることが出来た場合があつたことを知つて居る。余は人生の經驗を爲すに當り、余をしてもつと善人たらしめた特別の理由があつたことを知つて居る。余は自己の生ひ立ちに於ける種々の恩恵を想ひ起し、又生活の鍛錬に於ける種々の警戒を記憶する。一は余が心を呼び起し、一は余に取つて有益であつた事を告げ知らするのである。隣人については決して知ることの出来ない此等の事實を枚擧すれば、人類一般に罪惡があることや他人に對する種々の非難を離れて、余は實に恕す可からざる、特に愧づべき罪人であつたことを發見するのである。かくて他人の罪を定めてならないと云ふ原則は、轉じて余自身の罪を定めなければならぬ原則となるのである。此の原則は實に詩人ボルンスが

既に爲せし過ちは半ば數へ知るも
拒みて爲さざりしことは知り難し

と云つた如くである。余は固よりボルンスの氣の毒な生涯を批評することを好まない。されど此の語は二様に解することが出来る。他人はいざ知らず、余に於ては能く自ら「拒みて爲さざりしこと」を知つて居る。余は余が拒んだ恩寵を知つて居る。且つ之に由つて余自身を審判し、パンヤンが所謂「他人は皆我よりも善心を有つて居る」ことを感ずるのである。此等の事に關して屢ば論じたことのあるウイリアム・ロウは「神は自己の罪の外、罪の大なることを知り得る。どんな力をも人に與へ給はない、故に各人の知つて居る最も大なる罪人は己れ自身である」と云つて居る。是れはげに眞實である。耶穌基督に由つて己が生活が罪の生活であつたことを學んだ人々が、彼の使徒パウロと共に、最も明白な理由を以て「我は罪人の首長なり」と自白する所以である。

以上はやがて(第三)の點に吾人を導くのである。吾人は己れを知るがゆゑに吾人自身を宣告する。されどサマリヤの婦が耶穌について「我がすべて爲し、

事を我に告げし人」と云つたやうに、此の耶穌は又我等自身の外にも我等を知つて居る者があると云ふ眞面目な一大事を實現せしむるのである。此の我等以外の者は單に人間的審判者ではないのである。「神は果して何と云ひ給ふべきか」(アロウニ)。耶穌が吾人に確知せしめた神聖な活ける人格的の神は果して何と云ひ給ふべきか。其の審判は吾人自身に對して吾人が下す所のものよりも寛大であつて嚴格ではないのであらうか。神は實に恵み深い神である。されどテルトリアンが云つたやうに、「罪を憎むことに由つて自ら善を愛することを表はし給ふ」神である。彼は果して何と云ひ給ふべきか。神は吾人の實際に反して吾人を處置し給ふことは出來ぬ。さうして吾人の實際は果して如何。吾人の實際は既に云つた所の如くである。即ち吾人は自ら善と知りながら惡を擇んだ者である。さうして又之を云ひ遁るゝことが出來ないのである。吾人は又最も大な過失から吾人を引留めた幾千の理由と制裁とを棄て、顧みなかつたのである。

る。神が果して神であるならば、果して道徳的に神であるならば、此等の事に對して如何なる關係を有ち給ふであらうか。又如何なる關係を有ち給はなければならぬであらうか。吾人の宗教は今や一頓挫を來したのである。吾人の詮索は幸にして神を發見することが出來たけれども、吾人は餘りに眞實に、餘りに近く神を發見し、神も又同様に吾人を發見し給ふことを冀はないやうな暗愴たる恐怖心に遮られてしまつた。「我が魂は渴ける如くに活ける神をぞ慕ふ、何れるときにか我ゆきて神のみまへに出でん」と云ふ吾人の叫びは、忽然として「われ何處にゆきてなんぢの聖前を遁れんや」と云ふ他の叫びに變はらんとするのである。吾人は今や神と云ふ思想を好まないのである。來世と云ふ觀念を恐れるのである。願ふ所努むる所は神を忘れることである。死と云ふやうな神を思ひ起さしむるものは、悉く之を回避しようとするのである。「かくて良心は全く我等を臆病に陥らしむるに至つた」のである。

斯かる考へは、まだ基督の恩恵の光被しない異教徒の暗らい恐怖心に等しいものであらうか。然りと答ふるは甚だ容易いけれども、必ずしもそうではないのである。信仰に對する基督の事實の意義は、異教徒が神を殘忍、邪惡、褻瀆なごと考ふる際に起るやうな恐怖心とは全く別なものである。我は罪人であると思ふ人の心に起る嚴肅な思想は、決して神を殘忍、邪惡、褻瀆など考ふる所から出て來るものではない。大に之に反して正義至聖なる神の思想から起つて來るものである。他の語で云へば、神の神たる眞正な思想から出て來るものである。種々の事柄は此等の嚴肅な思想から離れしめやうとすることがあらうけれども、それは皆不信の精神、快樂の慾念、「眞神不在の希望」などから來るものである。基督の事實は此の恐怖心を不健全な痴人の夢として排斥するものではない。基督は之を喚び起し、之を深くし、且つ良心に其の永遠な道德的眞理であることを感せしむるのである。彼は唯罪惡ばかりでなく、審判に就いても

認知する所あらしむるのである。今や吾人は不健全な精神や迷信を去り、健全な道德的精神を以て嚴肅に問はうと思ふ、吾人は己が良心の前にすら立ち得ないのに如何で人の心を探り知る者の前に立つて懼れないことが出来るか。シユライエルマツヘルは「唯完全な人のみが神の前に立ち得る」と云つて居る。此の疑問は回避しやうと思はゞ回避することが出来るやう。一方には神の神たること、他の一方には吾人の吾人たることを嚴密に考ふることを厭ふに由つて、之を回避することが出来るやう。されど疑問は猶ほ依然として存するのである。斯くて罪惡に關する問題は益す深く益す暗くなりつゝあるやうである。此に品性に關する道德問題より以上のものがある。既に研究したる如く品性に關する道德問題もあつた。人生の害惡は悪い習慣や罪の性僻に於て其の果を結び、精神上にも肉體上にも影響を及ぼすのである。されどこれだけで以て害惡の意義を盡したるものとは云はれない。此等の結果の外猶ほ他に神に對つて永遠の結

果を生ずるものがなければならぬ。こゝに基督の事實の最初の意義を考究した際に見出したものよりも更に幾多の研究を要するものがある。不道德問題即ち単に品性として見た品性の問題は、之を罪惡問題即ち品性の永久的狀態即ち神の宣告の下に在る品性の問題に比ぶれば、小さいものであると云はねばならぬ。

此に至つて吾人の研究は痛ましい混亂に陥つた觀がある。品性と信仰の領域に於て幸福な希望の前途を展開した基督の事實は、歡喜の日に忽ち陰雲暗濛の光景を呈し、曩きの希望も幸福も一時に破壊し去られるやうな意義を生み來つたのである。試に思へ、罪と罪人たる吾人とに對する神の宣告は果してどんな意義があるであらうか。之を刑罰であるとすれば、それは唯言語の差別に過ぎぬ。何となれば刑罰とは畢竟不興が行為に表はれたものに外ならないからである。神の宣告は刑罰より以上の意義がある、何となれば神の宣告に由つて善は全く

消失し、善の希望も亦全く廢絶するからである。是れは果して耶穌が最後に吾人を導き來つたものであらうか。基督の事實は果して初には美と平和の思想に充滿するも、遂には苦痛と失望の語を以て終結する彼のハイネの詩の如きものに過ぎないのであらうか。
されど是れは吾人の罪惡と之に對する神の御心に關する耶穌基督の結語ではないのである。吾人は猶ほ讀み續けなければならぬ。

第二 宥恕問題

罪惡と罪惡に對する神の御心に關して、基督の事實に見出さるべき意義は甚だ簡單である。是れは議論を容さないのである。誠意を以て迎ふるならば、耶穌の與ふる光明と自由とは、全く先に云つた所に反し、吾人が神から不興を蒙り宣告を受くるのではなく、却つて恩恵と嘉納とを受くるものであることを悟らしむるものがある。若しさうでないならば、福音書の教ふる所、基督者の經

驗する所は全く虚妄である。基督の事實に於て、吾人は確かに神に對つて喜ばしい信任を有ち、悪き期待でなく、善き幸福な期待をすることができ、且つ神は吾人の敵でなく寧ろ永遠に吾人の味方であるとの確信を懐くことが出来るのである。若し基督の事實に此等の意義を見出した基督者が、神に關する最後の眞實な事實として之に安ずることが出来ないならば、耶穌は吾人の心を誤り導いたと云ふの外はないのである。

唯一語此の矛盾を解くものがある。神の恩寵及び保證と、罪人に對して有ち給ふ其の不興及び宣告と、此の兩面を調和し得るものがある。是れは表面の矛盾であつて調和することが出来る。吾人は一方を忘れて他方を承認せんと思ふものではない。神は吾人を受け入れ吾人を迎へ給ふと云つても、之れと同時に吾人は罪に満ちて居つて神は其の罪を正視し給ふと云ふことを記憶しなければならぬ。此の矛盾は公平に調和せられなければならない。唯一語之を調和し得る

ものは宥恕(若くは赦)である。宥恕と云ふ語は罪惡の實在と云ふ意味を含んで居る。さうでないならば何を宥恕するのであるか。此の語には又神の實在と云ふ意味をも含んで居る。さうでないならば吾人を宥恕する者はないのである。吾人は實に罪人である。されど又實に神に受け入らるゝものである。此の二つの事實は相合して神が吾人の罪を赦し給ふ意義を構成するのである。

結論は斯くの如く頗る單純であつても、實際は決してさうではない。此に至つて吾人は今や罪の事實の至つて困難な點、即ち罪惡宥恕の問題に到達したのである。神が宥恕を賜ふと云ふことは殆ど自明の公理であるかのやうに思はるゝ。されど罪を赦すことは神に取りて果して何事であらうか。今少しく精密に之を研究しなければならぬ。

吾人は、罪を赦すのは神も人も同じことで、神が我等の罪を宥恕し給ふことは、我等の一人が他の一人から加へられた毀害を容すのと異なることがない。

自然に思ふて居る。プリーストリーは、『若し我等の兄弟にして一旦悔い改めたならば、たとひ一日に七たび我等に罪を犯すとも、之を赦すべきである。されば神も又吾人に對つてこれと同じ寛大の原則に従つて處置し給ふの外はあるまい』と云つて居る。此の語はソシナスが云つたやうに「人々互に讓與するより以下に讓與することを神に望むも』のでないならば、全く正確な結論のやうである。されど少く注意して考ふるときは其の神に關する思想の不充分であることが明白である。かゝる問題は實に互に讓與するより以上に否な甚だ以上に神の讓與を許さないものである。自由意志についてルウテルがエラスムスに對つて『神に關する貴君の思想は餘り人間的である』と云つた言は移して以つてソシナスとプリーストリーに答ふことが出来る。

宇宙の道德的組織に對する神の關係と人の關係と此の二つに根本の差別があることを考一考しなければならぬ。吾人は單に一個の私人である。吾人が受け

た唯相互的に過ぎない毀害を容したからとて、倫理界に於けるプラトリーの所謂悪と其の報償とを「相較着」(フヒドオ)せしむる律法が、之が爲に撤去せらるゝのでもなく又曖昧に附せらるゝのでもないのである。宇宙の道德的組織は吾人と相干渉しない。又吾人の行爲で以て左右せらるゝものではない。吾人が通常容し得るのは唯一個の私人としてばかりである。若し吾人の宥恕が共同生活の道德的秩序をば危ふするやうな社會的惡結果を生ずるものであるならば、之を赦すことは到底不可能である。元來全能の神は大なる一私人ではないのである。神は宇宙の道德的秩序の本源又中心であつて、宇宙は實に神に頼りて存在するのである。されば神が若し此の律法を撤去するやうなことがあるならば、惡と其審判との倫理上當然な連結も共に撤去せられ、倫理上の混沌無秩序を來し、世界は最早道德的の組織がないものとなるであらう。斯くの如き宥恕は吾人に取つてはさうでないでも、神に取つては實に道德的無政府の行爲である。

されば此の事に關して神と吾人との間に存する根本的差別を承認するは極めて必要である。近頃米國の神學者クラーク博士は宥恕と云ふことは「律法若くは政治に關するものではない。根本的に個人的關係であつて、即ち神と人との個人的關係である」、且つ「正すべきものは個人的關係であつて、人が神の政治と正しい關係に復するのには先づ神との正しい關係を結ぶに至つて始めて出来ることである」と論じて居る。されどかゝる區別は眞の價値があるとは思はれない。唯言語上の抽象的議論を防遏することが出来るばかりである。何となれば神の律法と人格とは元來同一であるからである。神は即ち倫理的秩序其ものである。博士デールの言の如く、神に於て「律法は活きた者となつて居る」。故に宥恕に於ける「神との個人的關係」が恰も「律法に關するものでない」かのやうに語ることは眞の意義を得たものでないのである。余は再び之を云ふ、神は即ち道德法である。神は既に道德法であつて、吾人はさうでない故に宥恕に

關しては吾人と神との間に適當な比較がある筈はないのである。吾人の所謂相互間の宥恕と稱するものは、寧ろ吾人が受けた毀害を忘却するの意味であつて神の宥恕はかゝる單なる忘却ではないのである。若し道德的宇宙の基礎である正しい永遠な倫理的秩序が在つて罪と其の報償とを鉸着するならば、秩序其のものである者が之を分離して猶ほ能く宇宙の神たることが出来るか。宥恕は元來人には義務中最も明白なものであつて、神には其の凡ての問題中最も深遠なものである。

是れは實に博士チャーマルズが常に云つたやうに「神たる者に適はしい問題」ではないか。是れは個人的怨恨や個人的復讐と云ふやうな小問題ではない、宇宙の倫理的秩序、神の存在其のものたる秩序に關する問題である。さらば此の問題は如何なる性質のものであるか。是れはやがて罪の價は死であると云ふと同時に罪人たる吾人は永生の繼紹者であると宣言するものである。是れは道

徳的宇宙の倫理的秩序に由つて有罪の宣告を受けた人を救ひ、兼ねて又人を宣告した倫理的秩序を救はうとするものである。是れは永遠に正しからんと欲すると同時に永遠に不正の整理者たらんと欲するものである。問題は此に在る。人たる者誰も他人を容すに當つてかゝる問題に出で逢ふことはない。されど神は吾人を赦すに際してかゝる問題に出で逢はなければならぬのである。是れは神に取つての問題であつて「神たる者に適はしい問題」である。畢竟するに罪惡の宥恕に關する問題は、可否の問題、單なる意向の問題ではなく、方法の問題である。神に起り來つた神に適はしい問題は、宥恕の方法(即ち途)を發見することである。そうして其の途は孰れの方面に向つて求むべきであるか。それは最早疑點がないのであつて、自ら「我は途なり」と云つた基督の事實に立ち返らなければならぬ。是れまで此の事實を論ずるには成る丈け歴史の外に逸出しないうやうに勉めた。理論は大いに役に立つけれども又齟齬を生じ易

い。唯事實は眞理の津を問はうと思ふ者の針路を指し示す確實な北斗である。さうして今研究しつゝある問題を解くべき耶穌の事實は、取りも直さず其の死に關する事實である。罪の宥恕と耶穌の死とが相關聯することは彼自身之を云つて居る。教授デニイの所謂「神の子がゲツセマネに豫知してカルバライに遭つた経験」は即ち其れである。吾人は今此の事實に立ち返らなければならぬのである。

是れは實に歴史上最も深奥にして容易に測り知ることの出来ない光景に立ち返ることである。吾人は既に信じて神を崇め、敬畏の念を以て其の一舉一動を眺め、古來幾多の人物中獨一無比と思つた耶穌をば、今や近代の偉人グラッドストーンが誠に好く「最後の試験」と名けた其の死と苦痛との光景の中に仰ぎ觀んとするのである。其の血の滴のやう熱い汗、途切れ途切れの祈り、再三再四其の顔色を亂す苦痛、或は又壓し來る悲哀と沈鬱、戰慄と恐懼、其の言ひ難い

不安の憂慮、恐るべき精神の混乱、此等は果して何の意義があるか。吾人は實にかゝる苦難に對し殉教者に對するやうな謹嚴な念を起すことが出来ずして、嘲弄の指をさすやうな賤劣極まる不信仰者を蔑むものである。然り謹嚴の精神からは之を愚弄することは出来ないけれども、眞理を愛するの精神からはどうして此の苦難を崇敬することが出来るか。耶穌は此の點に於ても果して獨一無比の者であり得るか。果して最も偉大であり得るか。吾人はアテンスの牢獄にソクラテースが沈靜快豁に其の「最後の試練」に臨んだ驚くべき光景を想ひ起すのである。吾人は幾たびも「フヒドオ」の卷末を讀んで其の記事の壯麗を嘆賞して止まないものである。然るに翻つて耶穌の苦難を見れば、彼に對する吾人の崇敬は忽ち打撃を受ける。吾人の心は其の光景を嫌惡し、反抗して、耶穌も此の一事に於ては、吾人の完全な模範若くはインスピレーションではないと思はうとするのである。若し此の思想にして眞實であるならば、全然吾人の基督

教を變改するの力を有つて居るのである。
 斯の如き結論から吾人を救ふものが唯一つある。そんな比較は到底不可能である云ふことが即ち其れである。そんな不可能な比較をするが故にかゝる結論を生ずるのである。若しソクラテースが平然快げに取り上げた杯と耶穌が苦悶して取り離されんことを祈つた杯とが、共に齊しく單に死たるに止まらば、(後者の死は更に苦痛にして更に耻づべき死であるけれども) 斯の如き結論は正當であつて避けられないものである。されど耶穌の死がかゝる單純な死であるならば、彼を稱して神であると云ふのは、彼に對して正當な名を與へたものではないのである。彼を以て完全な吾人の理想であると云ふのも又決して正しき地位を彼に與へたものではないのである。然し彼の死は果して尋常一様の死であつたであらうか。耶穌自身はさうでなかつたことを告ぐるのである。
 吾人は此に再び耶穌の死が「罪の赦」の爲めであることを憶ひ起さなければ

ならぬ。又吾人が罪の赦即ち宥恕の意義について研究した所を思ひ出すのである。吾人は既に宥恕即ち惟神のみ真に赦すことの出来る宥恕とは、其の意味のうちに、必ず罪と其の報償とを相較せしむる倫理的秩序の全體に關する處置を含むで居ることを知つたのである。倫理の大法は如何なる事情があつても決して曖昧に附すべきものではない。否、却つて之を尊重し、之に準據し、以て其の正しとする所に従はなければならぬ。さて耶穌は其の死が罪の赦の爲めであることを云つたのであるから、其れが又罪と其の報償とを連結する倫理的秩序に従つた所爲であることを知ることが出来る。一體耶穌の心は神に對する愛の外何の羈絆のあることをも知らない心、其の思はひたすら喜悅を以てするでなければ神を念ふことの出来ない思である。然るに此の心を縛り此の思を壓迫したものは、實に倫理の大法（其の羈縛の恐るべきことは、既に宥恕を得て居る者の唯纒かに想像し得るのみである）であつたのである。或る人々は何の

考もなく之を語り、其の語る所に熱氣もなく光彩もないのである。されど真に言語の掩ふて居る實相に思ひ到るならば、必ず驚愕に滿され、一語言ふべからざる思想の襲ひ來るのを感じるであらう。耶穌の苦難は恐怖と驚異とを以て吾人を苦ましむる。かゝる苦難は、決して之を愚弄するの意はないけれども、之を崇敬することの出来ない人情の弱點を以て、果して其の意義の説明とすることが出来るか。將た又人類の罪惡と之を罰する道德的秩序との會合、即ち倫理的に正しい神からの最後の宥恕があるならば、何處にか、又如何にしてか、必らず起らなければならぬ所の恐しい程眞實で又絶えて曖昧を許さない會合から、出て來て居る未曾有の苦難としてより外に之を理會するの途はないか。兎に角かゝる會合の吾人の生活に起らなかつたことは吾人が具さに知つて居る所である。さらばそれが耶穌の苦難に起つたのであらうか。吾人が基督の苦難の杯とソクラテースの鳩毒の杯とを比較したとて基督の爲め耻辱と思ふ必要はな

ならぬ。又吾人が罪の赦即ち宥恕の意義について研究した所を思ひ出すのである。吾人は既に宥恕即ち惟神のみ眞に赦すことの出来る宥恕とは、其の意味のうちに、必ず罪と其の報償とを相較着せしむる倫理的秩序の全體に關する處置を含むで居ることを知つたのである。倫理の大法は如何なる事情があつても決して曖昧に附すべきものではない。否、却つて之を尊重し、之に準據し、以て其の正しとする所に従はなければならぬ。さて耶穌は其の死が罪の赦の爲めであることを云つたのであるから、其れが又罪と其の報償とを連結する倫理的秩序に従つた所爲であることが出来る。一體耶穌の心は神に對する愛の外何の羈絆のあることをも知らない心、其の思はひたすら喜悅を以てするでなければ神を念ふことの出来ない思である。然るに此の心を縛り此の思を壓迫したものは、實に倫理の大法（其の羈絆の恐るべきことは、既に宥恕を得て居る者の唯纒かに想像し得るのみである）であつたのである。或る人々は何の

考もなく之を語り、其の語る所に熱氣もなく光彩もないのである。されど眞に言語の掩ふて居る實相に思ひ到るならば、必ず驚愕に滿され、一種言ふべからざる思想の襲ひ來るのを感じるであらう。耶穌の苦難は恐怖と驚異とを以て吾人を苦ましむる。かゝる苦難は、決して之を愚弄するの意はないけれども、之を崇敬することの出来ない人情の弱點を以て、果して其の意義の説明とすることが出来るか。將た又人類の罪惡と之を罰する道德的秩序との會合、即ち倫理的に正しい神からの最後の宥恕があるならば、何處にか、又如何にしてか、必らず起らなければならぬ所の恐しい程眞實で又絶えて曖昧を許さない會合から、出て來て居る未曾有の苦難としてより外に之を理會するの途はないか。兎に角かゝる會合の吾人の生活に起らなかつたことは吾人が具さに知つて居る所である。さらばそれが耶穌の苦難に起つたのであらうか。吾人が基督の苦難の杯とソクラテースの鳩毒の杯とを比較したとて基督の爲め耻辱と思ふ必要はな

いのである。

斯かる思想は甚だ驚異すべきであるが、之を暗示する者は實に耶穌自身である。又「基督の秘れたる奥義を悟らしむる」力ある聖靈の啓導を受けた基督者から考ふるときは、常人の驚異すべき此等の思想に對つて驚き且つ反抗しないばかりでなく、却つて益す其の眞なることを自證するのである。耶穌の死は罪惡を宣告する神の律法の前に於て、罪惡の責任を負ふの意義であることは疑ふべくもないのである。基督者は己が信する基督教に影響を及ぼすから、かゝる思想を維持するのではない。全然他の理由に由つて之を確信するのである。耶穌の死（ゲッセマネからカルバリイまでの耶穌の經驗を總稱することを記憶せよ）に於て、基督者は己が受けねばならないものなれども之を受けず、若し福音を信じて耶穌に到るならば、又遂に之を受けないで済むものがあることを認知して居る。我等若し自己の頭上に凡ての罪惡を積みながら神の律法の前に來る

ならば、どう云ふ運命に遭遇するであらうか。其の運命は耶穌の苦難に明かに示されて居る。げに暗黒にして畏るべき秘義はゲッセマネと十字架を掩うて居る。されど基督に此の暗黒がなかつたならば、我等は必らず同じ暗黒の裡に居つたであらう、又必らず居ることを免れなかつたであらうと云ふ一事は甚だ明白である。是れは何れの時代の基督者も其の解釋には種々の差別こそあれ、此の差別よりも更に深い共通の經驗を以て、「彼は我等の愆のために傷けられたり」「彼は我等の爲に死せり」「彼は我を愛して我が爲に己れを捨てたり」と云ふ所以である。是れは更に多言を費す必要もない。賢愚を問はず、之より以上に又之より以外に云ふべき途があることを知らないものである。さうして之を云ふ者は「我」であり、「我等」であるのである。讀者諸君は斯かる代名詞を用ひないで耶穌の死の大なる意義を述べることが出来ないであらう。諸君が此等の代名詞を用ひ得るときは即ち既に言ふべきものを云ひ盡して最早基督の事實の最後の

意義を見出して居るのである。

されば基督の事實の最後の意義とは、彼が我等に代つて罪と其の正當な結果とを束ねて居る倫理的秩序に原きて整理の方法を講じ、以て宥恕の途を開いたと云ふ意味である。さうして若し倫理的秩序と干渉する所がないならば、神の眞正な結局の宥恕と云ふものは到底有り得ないのである。かくて耶穌は我等をして始めて倫理的秩序其のものである「神と和がしむ」るのである。之れを基礎として神と我等との友情に外ならない基督の宗教は起つて來るのである。此に吾人をしてかゝる見解を支持せしむる二つの大な柱があることを注意しなければならぬ。一は即ち倫理的原則であつて、他の一は即ち歴史的事實である。道徳的宇宙の秩序を撤去し若くは曖昧に附し難いことは神の宥恕の原則である。其の言と、其の生活と、其の品性及び人格の印象と、基督者の意識とによつて説明せられた耶穌の死は歴史的事實である。神學上の術語に従つて「贖罪」

と稱する一大現象は、此の二つの柱の上に支持せらるゝのである。

多くの人々は單に此の點に止つて、之れ以上に進むことを願はない。彼等は贖罪の事實を承認するけれども、之を解釋することを好まない。或はコームリツヂと共に「是れは事實である。事實の報道に由るの外は、唯結果の如何によつて知り得べきのみである」と云ひ、或はバットラーと共に稍控へ目に「若し聖書の記事が、基督の満足は神秘にして知られないと云ふならば、吾人は其の如何にして得られたかを問ふことなく、唯分け與へらるゝまゝに感謝して其の恩恵を受くべきである」と主張して居る。若し此等の見解が、耶穌の功績である罪の宥恕の原則は、到底充分に説明し盡すことが出來ないと云ふのであるならば更に異論はないのである。何となれば遺憾なく贖罪の意義を知らうとするならば、其の人は神の最も大なる愛と宇宙の最も嚴かな律法と人類の最も暗黒な罪惡と此の三者の究極の關係とを知らなければならぬからである。されど

コーレルリツヂとバットラーの云ふ所が、此の大きな事實に於て一も道徳的合理的原理を辨識することが出来ないこと云ふのであるならば、それは全く許容することの出来ない見解である。若しさうであるならば、贖罪と云ふことは適當な意味に於て宗教的事實とすることは出来ないものである。何となれば宗教の眞理は思考力を有する者の生活の原動力となり、之を心服せしめ、且つ之に訴ふる所の眞理でなければならぬからである。故に其の事實たるや、決して思想に徹底しないやうなものであつてはならない、即ち不透明な事實であつてはならないのである。若し贖罪が道理であることを拒むならば、宗教から之を放逐して單に記號的事實とするものである。固より罪惡と云ふものは吾人の測り知ることの出来ない神秘の裡に没して居るけれども（故に神の思想も「我等の心のはかりより大なる」ことを記憶せねばならぬ）、單に神秘ばかりとは思はれない。其の原理はたとひ知り盡すことが出来ないでも、必らずや進んで學び得らるゝ

ものがなければならぬ。且つ此の原理は基督者の思想や經驗に聲のない秘奥の暗黒を示さないで、合理的、道徳的眞理の光明を示さなければならぬのである。斯く論じて來ると、此等の原理の説明について此に數言を費やすのは多分正當であらう。此の講演は勿論神學上の講演ではない。且つ基督の事實の他の意義を明かにするに當つて、例へば、聖靈若しくは基督論に於て、其の教理を論ずるの必要がなかつた。此等の場合に於て、宗教的事實は既に其れ自身充分の意義と價値とを有つて居つたのである。されど贖罪の問題は稍前者と趣を異にして居る種々の理由がある。吾人若し此の問題に關して思想が曖昧であるか、或は誤謬に陥るやうなことがあるならば、贖罪の事實は正純な宗教的價値を有つことが出来ないであらう。故に耶穌基督の贖罪に由れる罪の宥恕の心靈的原理に就いて、附論として此處に二三の注意を追加しようと思ふ。固より簡単な梗概

に過ぎないことは讀者の諒察を請ふのである。

附論 贖罪の原理

抑も人類の罪を贖ふ耶穌基督の事業は其の生活の新しい部分ではないのである。單に全生涯を通じて彼の目的であつた人類救拯が、其の慘憺たる終局に到達したものに外ならないのである。故に吾人が求むるものは新しい原理ではないのである。寧ろ彼の事業の神秘でない方面に於て、既に認め得られた主要な原理の新しい適用に過ぎないのである。されば余は先づ我等を救はん爲に來つた基督と人類との關係の原理であるものは何であるかを問はうと思ふのである。

其の原理を見出たすことは左程困難ではない。それは既に基督の事實を研究した際に屢ば接觸した所のものである。基督の事實に於て既に見出した最も單純な最初の意義を想ひ起して見よ。吾人が先きに倫理的な生活と品性に對する基

督の意義を論じて見出した所は、彼が高尙な教訓や模範を吾人に遺したばかりでなく、更にそれ以上のものがあると云ふとであつた。吾人は彼が其の靈(精神)を我等に與へたと云ふとは、驚くべく然かも眞實に、彼れ自身が我等の思想、感情、意志の中に入り來つて此等の一部分と爲つた、要するに、彼は我等の一部分と爲つたと云ふ意義であることを見出した。「最早我生けるにあらず、基督我に在りて生けるなり」。彼は吾人のより善き眞我である。基督教の特色は實に此の點であつて、佛教或は回々教が併行するとの出來ないものである。是れは基督と人々との救拯的關係に於ける顯著な要素である。さうして其の原理は最も簡單に云ひ表すことが出来る。此の原理は即ち基督と人類との合體即ち内部的の一致である。是れは「我は葡萄樹、爾らは其の枝なり」と云ふ譬に於て、基督自身の言で言明せられた思想である。使徒パウロは又頭と肢體との譬を以て此の思想を敷演して居る。歴史上我等に來り、又我等の内部に於て我等と一

體と爲つた基督との靈的一致（基督は驚くべき有様に於て人たるもの、最善の我と一體である）は、凡ての救済的關係の原理であつて、吾人は之を離れて基督を論述することが出来ないのである。余は再言する、宥恕の根本に横はつて居る原理は新しい思想でなく、同一思想の更に進歩した適用に過ぎないのだ。

されば吾人が見る所の宥恕問題は、方に次の如くである。神は宇宙の倫理的秩序の本源又支持者であつて、寧ろ秩序其のものである。さうして眞に倫理的である宇宙の秩序が存在するならば、此の秩序は必らず罪惡を宣告し、且つ罪と其の審判とを絞着せしめなければならぬのである。果してさうであるならば、神はさうして罪ある人を赦すことが出来るか。基督と人類との一致の原理は、此の問に答へて一反問を出し神は如何にして基督を有つて居る人類を宣告することが出来るかと問ふことが出来る。若し基督にして神が彼を離れて我等を見給ふことの出来ない程に我等と一體であるならば、其の宣告は如何にし

て我等に對する神の裁決たることが出来るか。此の一致合體は實に贖罪の原理であつて、基督教の何れの方面にても齊しく根本的原理であるけれども、特に宥恕の方面に於て新しい深遠な意義と結論とを有つて居るのである。

最も卓出した二大家の語を此處に引照するならば、此の新しい意義が果して何處に在るかを説明するに足るものがあると思ふ。ルウテルの『加拉太書註釋』に有名な一句がある。彼は特に力ある語氣を以て一の方向に此の一致の思想を適用した。彼は基督に語り給ふ神の言として「汝は宜しく拒絶者たるペテロたれ、宜しく迫害者たるパウロたれ、……要するに、汝は宜しく天下萬民の罪を犯した其の人たれ」と記し、さうして彼は更に「律法來り臨んで云ふ、余は彼（基督）の罪人たることを見出す、……故に彼を死なしめよ」と書いて居る。此の語は別に説明はいらない、ルウテルの意に疑はしい所はないと思ふ。されど卓出した今一人は、同じ問題について他の方向に此の思想を適用した。マクレ

オド・カムベルの贖罪に關する著書は或る部分に多少批評すべき點があるけれども、此の種の著書中最も注意して研究すべきものである。彼も又ルウテルに似た語調を以て「試みに人類の凡ての罪惡が一人の靈魂に由つて犯されたと思像せよ、……さうして此等の愆を悉く荷つた此の靈魂が罪から聖善に移り……神の義に由つて全く義とせられたと思像せよ」、「神の聖者でありながら天下萬民の罪を荷つた基督の實際の立場」は斯の如きものであつて、此の義は「眞實な又當然な満足」であるべき筈であると云つた。言を換へて之をルウテルの見解に對照すれば、律法が來り臨んで基督罪人と爲つて死なねばならないと云ふのでなく、寧ろ罪人基督となつてさうして律法が満足せられると云ふのである。贖罪に關する凡ての見解は、其の取つて居る方向に従つて大略二つに區別することが出来る。一は我等及び我等の罪惡に對する基督の一致に重を置き、「罪を知らざる者を神我等の爲に罪人と爲せり」とし、他は基督に對する人類

一致に重を置き、「一人の順に由つて多くの人義とせられたり」とするのである。抑も二者其の一を擇ぶべき性質でないものを選び、一を取つて他を排するやうなことは甚しい誤謬である。今此の二種の見解の如きは共に併せて把持しなければならぬものである。吾人は宜しく二つの方面に向つて贖罪の原理を研究しなければならぬ。それは即ち罪人と基督との間に存する一致若くは一體の原理である。一致は元來二つの者の一致であるが故に、二つの補足的方面があつて又二様の關係を生み出すものである。基督と其の民とが果して一體であるならば、基督の基督たる所から我等に對する意義と、我等の我等たる所から基督に對する意義と、二つの意義があつて、此の結論と彼の結論と共に眞實であるのは當然である。吾人は一面ルウテルの指し示す方向に従ひ、又一面カムベルの指し示す方向に従はなければならぬ。かく贖罪は其の原理が一致であるが故に、二つの方面があつて、一方に偏するばかりでは、吾人は決して斯かる大秘義に

到達することが出来ない」のである。

此の一致の二方面のうち、ルウテルが主張して居る方面の意義は多数の人の餘り歓迎しない所である。されど人と爲ると云ふことは、既に基督が人の立つて居る立場に或る關係を有することを含んで居らなければならぬ。人類は既に或る立場に立つて居る。即ち罪惡と其の刑罰とを聯結する倫理的秩序から有罪と宣告せられた立場に立つて居る。基督が若し此の點を明かにせずして人と爲つたのであるならば、彼は人類必須の要點を回避したものと云はねばならぬ。されど之れが實際であつたと思ふべき道理はないのである。彼は人を救ふことを其の任務とし、之れが爲に救拯の必要が生じて居る状態、即ち宣告された状態の下に在つて人と爲つたのである。基督は一言一行たりとも此の状態を忘却し若くは輕視するやうなことはない。否な彼は之を認めて己れ自身の状態としたのである。是れは實に彼が自ら進んで合體するに至つた人類の状態であつた

からである。然る後彼は之れを處置するの途を取つたのである。其の處置は高尚で、莊重で、且つ眞實で、之を避け若くは曲げなごするやうなことがない。從容として人類の受くべき分を己が身に引き受けたのである。吾人は是れ以上を云はないやうに注意しなければならぬ。此の處置は實際果してどういふ有様に遂行せられたか、又彼に取つて實際どういふ意義があつたか、此等は輕々に論述すべきではない。神が基督を罰し給うたとか、若くは神が基督を怒り給ふとか云ふやうな言は、甚だ不適當であつて、殊に後者の如きその不可能の事であることはカルピンも之を認めて居る。されど明白に主張しなければならぬことが此に二つある。一つは罪と其の刑罰とを聯結する倫理的律法は決して破壊することが出来ない、否な却つて眞正に適切に其の効力を有つて居らなければならぬ。且つ其の遺憾なき發表は必らず基督の上に臨まなければならぬ。さうして此の事が我等の上に来り臨まず、又將來に於ても來り臨まないことは福音の

本旨であるけれども、然かも之れが爲めに倫理的律法は塗抹除去せらるべきではない。否な既に其の整理の途が講せられたのである。讀者諸君が何處にて整理せられたかと問ふならば、余は基督人となりて人類の立つて居る状態に立ち、其の結果を己が身に引き受け、我等に代つて悉く其の責任を荷つた事實に於て成就せられて居ると答へようと思ふ。如何に困難があつても、又如何に難解の秘義があつても、次の事實は、神から出づる宥恕と云ふ宥恕の最眞最要の原理を支持するものである。即ち道德的宇宙の倫理的秩序は、之れが爲めに決して曖昧に附せられなかつたと云ふことである。又我等に代つて此の倫理的秩序に應答せんが爲に「罪人の中に數へられたる」基督が、我等を己れに合體したことの眞實であることも必ず支持せられなければならぬ。たとひ基督は吾人に對する凡ての關係に於ける如く、此の點に於ても又吾人の説明以上であつても、此等は必ず支持せられなければならぬ。

以上は宥恕の原理である基督と我等との一致の一方面である。されど是れは唯其の一方面に過ぎないのである。固より根本的のものであるけれども未だ盡さない所がある。是れは唯贖罪の半面であつて他の半面の大切であることも又やがて明かにしなければならぬ。我等たとひ基督が彼自身罪と其の刑罰とを聯結する倫理的秩序に應答したと云ふ事實を許容しても、それが我等に影響する所は果して幾何であらうか。我等は基督ではない。基督は固より倫理的秩序に應答したであらう。されど基督の應答はまだ余の應答ではない。我等若し基督であつたならば、其の應答は固より充分であつたであらう。されど我等は基督ではないのである。我等は今猶ほ罪人であつて、倫理的秩序に應答しなければならぬ責任がある。是に於てか基督教の原理である基督と人類との一致は再び現はれて來るのである。さうして其の充分な適用に由つて宥恕の福音を完結するのである。

吾人は再び基督教の原理の云ふ所を聞かなければならぬ。義なる基督は既に罪と其の刑罰とを聯結する倫理的秩序の要求を充たし、今や將に諸君の眞我たらんとを要求しようとするのである。彼は既に神の律法に對する人類の一般的關係に従つて己れを人類と合體したが、今又個人的一致の關係を結ぶとを人々に要求するのである。是れは宥恕の福音が、基督の爲めに死んだと云ふやうな單なる事實若くは教理を信するのではなく、かく罪の爲めに應答した人格者を智情意に受け入れて一體となるべく要求するものである。故に諸君が若し眞に靈的意義に於て彼(即ち基督)であることが出来るならば、彼の應答は又眞に靈的意義に於て諸君自身の應答であるのである。是故に耶穌基督に在るものは罪せらるゝことなし。かくて人々は罪と其の刑罰とを聯結する律法に對して始めて完全な應答をするのである。何となれば彼等は應答者と既に内部的實際に於て一體であるからである。

斯くの如く吾人と基督との一致、即ち智情意と生命とに於ける内部的一致は、彼が我等の状態を己れ自身に合體して以て處置した所のものを完成するものである。宥恕の福音は其の結果である。其の如何に倫理的であるかを注意せよ。單に基督の事業から生じた變化ばかりを高調する虚妄な福音は、正當な直接的倫理的内容を有つことが出来ないとの非難を必らず免れ難い。福音的新教主義に於ては罪の宥恕を以て基督教道徳と別箇のものとなし、二者相關係しないかの如くに主張するのである。斯の如きは醇正な論述でないばかりでなく、甚だ缺點の多い論述である。眞正な論述は次の如くである、罪の赦は單に基督があるが爲めに與へらるゝものでなく、基督に在つて與へらるゝのである(此の點は特にルウテルの主張した所である)。福音には單なる宥恕はない。福音には又基督と離れた宥恕はない。諸君は宥恕者なく、又心意と情緒と生命との内部的に一致に彼を受け入るゝことなくしては、決して宥恕を得ることが出来ぬ。唯